
姫の騎士

世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の騎士

【Nコード】

N 8 6 2 5 H

【作者名】

世界

【あらすじ】

ある少年を中心にした。ハーレムコメディの予定です。銀髪の超美形で完璧なラル、そのラルに恋する二人の王女にその王女の父親（王）に仕える秘書二人、さらには、人間界留学！しかも、通うことになった学園に幼少時代の女友達！彼女達はラルに積極的にアプローチをするけど？鈍感少年のラルはまったくきづかない。ラルをめぐる彼女達の戦いは始まったばかりである。更新は不定期になるかも…

始動（前書き）

初めてです。文章におかしい所があるでしょうが、そこは、気にしないでください。

始動

これは今より少し先の未来のお話

技術が発展し気軽に宇宙に行けるようになった人間界そして、魔法を使うことのできる。

しんぞく まぞく
神族、魔族がいる異世界

そしてこれは、

人間界、異世界の少女達がある少年に想いを伝えることに、奮闘する恋物語である。

人物紹介1（前書き）

どうも世界です。

サイトがリニューアルしたので、姫の騎士も改めて書き始めました。
文章におかしい所があるのでそこはおおめに見てください。

人物紹介1

主人公

ラルⅡグローバル

神族、魔族のハーフで、17歳の高校2年生

ハーフであるため右目が青色で、左目が赤色である。

銀髪の超美形で長身の少年で成績優秀、スポーツ万能、家事は一流しかし猫とかわいい物に目が無い超一流の鈍感少年。

人間界に來た理由は、神族、魔族の王女2人の護衛のため。

ちなみに、ラルの親は神族（母親）、魔族（父親）の中で最強と言われるくらいの、魔法と魔力の高さ、剣術、武術の達人だった。しかし、ラルが7歳の時に事故で亡くなり、その後は父方の祖父に引き取られ、祖父の亡くなる12歳まで、魔法、剣術、武術をはじめとするありとあらゆる事を教えられた。

王女2人とは幼なじみである。

神族の王女^{ヒロイン}

ルナⅡスローフィールド 17歳

赤髪の腰にかかるぐらいの長髪で、ラル同様に超美形。人間界に來た理由は人間界と異世界の発展のため。

スポーツと料理が得意で勉強はその分苦手である。

魔族の王女^{ヒロイン}

リアスⅡウオーカー 17歳

青髪の腰にかかるぐらいの長髪でラル、ルナ同様に超美形。人間界に來た理由はルナと同じ。

ルナとは正反対にスポーツと料理が苦手で、勉強が得意。素直な性

格で少し騙されやすい。胸の大きさは平均的なルナより少し大きい。

神族の王 神帝

シガルⅡスローフィールド

異世界トップクラスの魔力を持っているが、娘には甘い親バカ。

魔族の王 魔帝

ゲイルⅡウォーカー

神帝同様に異世界トップクラスの魔力を持っているが、やっぱり娘には甘い親バカ。

神帝の秘書 ヒロイン

マナⅡフランベルク 23歳

ラルのお姉さんの存在

ラルのことを弟として見ていたが、いつの間にか異性として好きになっっていた。

肩にかかるぐらいの金髪で女性にして大きい170cmの身長を持つが出るところは出ている。

魔帝の秘書 ヒロイン

フィリアⅡハーヴェイ 23歳

マナ同様にラルのお姉さんの存在。

ラルのことが好きでラルの前では普段のクールさはなくなり、大胆

で甘えん坊になる。

4分の1、日本人の血が混じっているため黒髪の長髪でいつも髪をおろしている。

人物紹介2（前書き）

どうも世界です。

ウチの学園がテスト前なので、更新が遅れました。

キャラに少し変化しました。これから姫の騎士をよろしくお願いします。（土下座）

人物紹介2

人間界

すずみやりん

鈴宮凜（人間 ヒロイン）

肩にかかるぐらいの黒髪でラルやリアス同様に成績優秀ではあるが、スポーツと料理が壊滅的である。（料理は作ると何故か真っ黒になってしまう）

性格は明るいが何かに失敗するとかかなり落ち込む。

成績優秀のわりには考え方と行動が子供っぽい。

ヒロイン

人間

せんどう ゆり

仙道百合

腰までかかる長髪の茶髪でポニーテールがよく似合い明るく活発な性格。

その性格同様にスポーツが得意だが勉強がかなりヤバイ、テストではいつも赤点ギリギリで成績優秀の人たちを少し妬んでいる。

神族

ヒロイン
魔族

レイナII フレイル

赤髪の長髪で髪型をいつもツインテールにしている。神族、魔族の力を少し強く受け継いでいるので、魔力が多く。魔法の威力が通常の神族、魔族より少し高い。

少し感情的になりやす性格。小さい胸が悩みの種でそのことをいじるものは得意の火の魔法を浴びせる。

ハーフのため右目が少し濃い青色で左目が少し濃い赤色をしている。ちなみに数学と英語が極端にできない。

神族 魔族のハーフ（ヒロイン）

ラフィナⅡクロスロード

肩より少し長い程度の金髪で神族の力を強く受け継いでいるため治癒魔法が得意。そのため右目は濃い青色で左目が青みのかかった赤色をしている。

ちなみに神族は治癒魔法、魔族は攻撃魔法が得意。
おっとりとした性格をしている。

ラル達に通う学園は冬月学園ふゆつきがくと言い、ラル達全員はみんな同じ21A組である。

プロローグ（前書き）

どうも世界です。

テストに文化祭、部活の大会で更新が遅くなりました。

これからも頑張っていくので、姫の騎士をよろしくお願いします！

（土下座）

プロローグ

そこは真っ白の世界だった。俺はその世界を歩き始めた。

五分ほど歩いただろうか？ 真っ白の世界に三つの人影が現れた。そこにいたのは死んだはずの両親と祖父だった。

「父さん、母さん、じいちゃん！」

俺は叫びながら、三人に駆け出した。しかし、三人との距離はぜんぜん縮まらない。それどころかどんどん遠くなってしまふ。

「待って、待ってよ！父さん、母さん、じいちゃん！」

俺は叫び続ける。

「俺を1人にしないで！」

叫びながら、起き上がる。

「ゆ、夢？」

ラルは眩きながら辺りを見渡す。

見慣れた自分の部屋。壁に掛けられている仕事着、枕元にあるお気に入りのお猫を形どった目覚まし時計。

時刻は午前5時を差している。

ラルは右手を額にやり、考えるような仕草をとる。

「明日から人間界に行くから気を引き締めろというわけか。」

ラルは眩き、仕事着に着替えた後部屋を出ていき、ある場所に向かっていた。

異世界く神族魔族共同会議室く

会議室に七つの影がある。

一つはもちろんラルである。そして残りの六つの内二つは神族、魔族の王である神帝、魔帝である。その両隣には神帝、魔帝の娘であるルナとリアス、そして神帝、魔帝の秘書であるマナとフィリアである。

「それでは、これから人間界の留学について説明をしたいと思います。」

ラルが話始めた。

「まずはじめに、ルナ様とリアス様に通っていた学校は日本にある冬月学園になります。日本は比較的治安が良く、通っていた冬月学園は自由度がかなり高く神族、魔族、人間にオープンな学園のためルナ様とリアス様に負担をかけることが少ないと判断したため選びました。」

ラルが話に一旦区切りをつける。

「ですが、問題が少し発生してしまいました。」

ラルの言葉に神帝が口を開く。

「その問題とはなんなんだ？ ラル」

神帝である、シガルがラルに質問した。ラルはため息をはき、

「それが、どこかの神族、魔族の王がろくに仕事をしないで、自分の娘ばかりにうつつを抜かしていたので、王としての仕事が一ヶ月たまってしまして…」

目がまったく笑っていない笑顔でしかも、少し殺気を含みながら神帝に応えた。

ギクッ！ と、神帝、魔帝が身を縮めた。

「お父さん？」

「パパ？」

神帝の娘であるルナに続き魔帝の娘であるリアスが笑顔でしかも、かなり怒っている感じで顔を向けた。

「いやゝさぼっていたわけではないよ」

「そうだ！さぼって…」

『二人とも同罪です！』

『はい……』

魔帝のゲイルに続き、神帝のシガルが反論するが、問答無用で黙らされる。

娘に怒られる神帝、魔帝の絵はかなりシュールだった。

「ま、とゆう訳で三日後にせまったルナとリアスの人間界留学の時には、二人は来れませんのでそのつもりで」

ラルは本当に楽しそうな笑顔を2人に向けた。

『待って…』

二人は何か言いたげだったがラルの言葉を遮った。

「あ、仕事が終わったら人間界に来ていいですよ」

ダッ、バン！

目にも止まらない速さで会議室を出ていった二人に、ラル達五人はあきれ果ていた。

「ラル君ありがとうございます、神帝様達がちゃんと仕事してくれます」

神帝の秘書であるマナがラルに礼を言った。魔帝の秘書であるフィリアもそれに続く。

「本当にありがとう。ラル君」

「いえ、当然のことをしただけですよ」

ラルは微笑し恐縮したように応えた。

ルナ、リアス、マナ、フィリアがその微笑にめを奪われたのは言うまでもない。

人間界留学前夜（前書き）

更新が遅くなってしまって、本当にすみませんでした！ m
遅くなった理由にネタを作っていたからです。 m

これからも姫の騎士をよろしくお願いします！ m
m

人間界留学前夜

満月の輝く夜だった。

異世界の比較的都心に近い一軒家から男女の声がする。

「明日からルナとリアスが人間界に留学するけど、大丈夫かな？」

家の主人であるラルから不安が感じられる呟きがこぼれる。
その呟きに応えたのは、ラルの家に一緒に住んでる、神帝、魔帝
の秘書であるマナとフィリアである。

「心配しすぎだよラル君」

「そうそう心配しすぎラル君は。さすがに王女様に手を出すバカは
いないでしょ」

二人ともソファーに座りながらコーヒーを飲んでいる。

「マナ姉もフィリア姉も油断しすぎだよ」

ラルはそんな同居人をジト目で見ている。

『大丈夫、大丈夫』

声をそろえて応える二人に対してラルは不安だった。

理由は単純明快、自分にだけ王女であるルナとリアスの住む場所が知らされていないからだ。

「だけどマナ姉、フィリア姉。俺にだけルナとリアスの住む場所が知らされていないよーな、気がするんだけど？」

ギクッ！

二人は一瞬だけだが、動きが止まった。そしてそれを見逃すラルではなかった。

「マナ姉、フィリア姉。何か知ってるね？」

ものすごい笑顔で二人に聞くるラル。

『私達は何も知らないよ』

二人は応えるがウソだとバレバレである。

「そっか、姉さん達は何も知らないだね」

二人はほっと息を出す。そして、ラルは笑顔のまま二人にある絶望を伝える。

「じゃあ、明日の朝食は俺作らないから」

『えっ』

二人の時間が止まる。それもそのはず、ラルの料理の腕前は王族専属のコックと同等以上なのだから。

笑顔のまま二人に告げるラル。

（（ダメだ。ラル君にウソは通用しない！））

瞬時に考えをまとめた二人。そもそも前夜までラルに気付かれなかったのが奇跡だった。

『本当のこと教えるから』

二人はラルを抱きしめながらラルに真相を教えた。

〽数分後〽

「じゃあ、ルナとリアスは俺達三人と一緒に人間界で暮らすってこと?」

『はい…』

あきれ果てるラル。それに応える二人。

真相を単純だった。どこかの娘バカの神帝、魔帝が娘の想い人^{ラル}と一緒にすまわせたかった。しかしその想い人^{ラル}が許すはずがない。というわけで想い人^{ラル}に内緒で住まわせるようにしようとのことだった。

(あのバカどもが!)

ラルは家を飛びだしすぐさま、転送魔法で娘バカ二人を呼び出した。

魔法陣から出てくる娘バカ二人。いきなりのことで混乱している2人を無視するラル。

「神帝様、魔帝様。何で呼び出されたか分かりますね?」

ラルの声を聞くなり転送魔法で逃げようとする二人しかし、それは無理だった。

ラルの家はラル以外が魔法を使おうとすると魔法を無効化にする結界が起動してしまうからだ。

『待って……』

ラルに声をかけようとした二人。しかし、

「さあ、逝きなさい！」

問答無用に攻撃魔法を使うラル。

『ギャーーーーー!!』

神帝、魔帝はラルの攻撃魔法をモロくらい全治一ヶ月のケガを負った。

余談だが、本当のことを話した二人を翌日の朝、ラルの手作りの朝食を食べ、さすがにやり過ぎたと思ったラルはルナとリアスの同居を許した。

娘バカ二人は仕事とケガで人間界に行けるのが、三ヶ月ほど先になってしまった。

娘バカはやっぱり娘バカ(前書き)

短い。いつも以上に短い。このダメ作者——————(読んでいた
だきありがとうございます。m (m)

娘バカはやっぱり娘バカ

あの娘バカ二人を病院送りにして一夜が過ぎた。

ラル達五人は人間界に行くため。「門施設」(ゲート)に来ていた。

「門施設」(ゲート)それは異世界、人間界をつなげる。絶対無二の存在である。

「今日から人間界に留学していただきますが、神帝、魔帝は都合により三ヶ月人間界に来れませんので」

まったくの無表情で一緒に人間界に行く四人に告げるラル。

『は、はは』

苦笑するしかない女性陣。

「まず、人間界に着いたら我々が住む家に行きその後は、人間界に来た初日というわけで基本的に自由にします。次に……」

「ねえねえ、ラーちゃんラーちゃん」

ラーちゃん、ラルのことをそう呼ぶのはこの中では一人しかいない。

神族の姫 ルナⅡスローフィールドである。

「なんですか？ ルナ様」

「ここにいる人は皆、身内みたいな物だから敬語、使わなくもいいんじゃない？」

上目を使いながら、ラルに聞くルナ。

ルナの上目はかなり可愛い、そこら辺の男はイチコロだ。しかしそこは鈍感少年ラルまったく動じない。

「わかったよ、ルナ」

「じゃ、人間界に行きますか！」

ルナの頼みに素直に応じ、ゲート施設に向かうラル達

＼娘バカ2人＼

病院の一室にいる神帝、魔帝の二人。そして、その脇には山積み
の書類、日に日にその数は増えている。

娘バカ二人の心は一つになった。

『『ラルーールナ（リアス）を頼んだぞー！ー！！（よー！ー！）』』

「うるさいですよ！」

『はい……』

看護師に怒られながらも愛する娘のために叫ぶ神帝、魔帝であった。

フィリアは意外に策士（前書き）

短い。約1ヶ月経ってるにこの短さは無いな！
次はもっと頑張ります！

m
〔 m

フィリアは意外に策士

ゲート
門施設から人間界に来たラル達五人。

ラル達は人間界で住む家に来ていた。

「まともだ……」

ラルはかなり驚いている。ラル自身、あの娘バカ二人が関与しているので、住居にも何かあるだろうと思っていたから。しかし、そこには普通の一軒家があった。

ラルがぼーっとしていると、

「どうしたのですか？」

「何でもないよ、家に入ろうか」

リアスに顔を覗き込まれたラルはそう言いながら四人を連れて家に入った。

>家の中<

「綺麗だな」

ラルはリビングにいきつぶやいた。

ラルは家の中に何か仕掛けがあるだろうと思っていたが、外見同様にまともであった。

「ラル君、さっきからずっとぼーっとしているけど大丈夫？」

マナがラルに話かける。

マナに言葉に女性陣が耳を傾ける。ラルがぼーっとしているのに四人共気づいていたのだ。

「あー、いや。神帝と魔帝が関与しているって聞いてたから、何かあるだろうと思っていたんだ。だけど けっこうまともだからね、驚いていたんだ」

ラルが素直に理由を告げる。

「そのことなら、私が事前に手を打ってたよ？」

「……それってどういうこと？」

フィリアの言葉にラルが たずねた。

「まー、あの二人が関与してるのがわかったからね、あの二人が業者に頼んで 建てる家の設計図と見取り図をリアス様とルナ様のご希望の普通の一軒家の物と替えておいたの」

「フィリアいつの間にそんなことを……」

「あんたが、体調を崩して休んでた時よ。マナ」

「は、はは……ありがとう」

かわいた声を出して礼を言うマナ。

「真相がわかったところでこれからどうしますか？」

「とりあえず、このあたりを歩いてくるか。周りに何かあるか知っておきたいし」

フィリアの言葉にラルが答える。

「ついでに、夕飯の材料を買いにいかない？」

ルナが皆に提案する。

「でも時間的には少し早いですから、外でお茶の飲んでから買い物に行きませんか？」

ルナの提案にリアスがお茶会を付け足す。

「賛成！」

「私も大丈夫ですよ」

「俺は良いと思うよ」

二人に反対するものは居ないようだ。

時間停止の笑顔（前書き）

友達に言われて今回からラル視点でいききたいと思います。

時間停止の笑顔

俺達五人は今駅前の喫茶店にいる。リアスの提案どうりに夕飯の買い物前にお茶を飲んでる。

人間界のお茶は久しぶりに飲むがやはりうまいな。
幼少時代に飲んだお茶よりも格段に美味くなっている。

「美味しいな。この紅茶……」

「そうですね。皇宮のものより少し味は落ちますが民間のものとしては、かなり上級のものじゃないですか？」

リアスの味覚はこの五人の中では一番優れている。
そのリアスがそう言うなら間違いないだろう。

「うーん！ 紅茶も美味しいけどこのケーキも美味しい。私イチゴのショートケーキ好きなんだよね！」

ルナが俺のとなりでイチゴのショートケーキを食べながら笑顔で叫んでいる。

マナ姉とフィリア姉は俺たち違い紅茶ではなくコーヒーを飲んでいる。

「やっぱりコーヒーを飲むとおちつきます」

「コーヒーは苦いけど、ミルク入るといい感じになって、チョコ

レートケーキとよくあうな」

フィリア姉はブラックコーヒー。マナ姉はミルク入りコーヒーとチョコレートケーキを食べている。

フィリア姉は仕事モードでブラックコーヒーを飲んでいる。クールな感じなフィリア姉には、ブラックコーヒーがよく似合っている。マナ姉は苦いコーヒーにミルクを入れてまろやかにして、チョコレートケーキとあわせて食べている。

「ねえ、みんな。さっきから視線を感じるけどどうしてかな？」

ラル君（ラーちゃん、ラーくん）は鈍感だからな」。

そういう四人もラルにしか興味がないので自分が見られていることに気付きながらもまったく動じていない。

実際は美形の五人がオープンカフェでお茶を飲んでいるから男女問わず見ているから。

女性陣はラルを。男性陣はルナ、リアス、マナ、フィリアを見ている。

女性のほとんどは超美形のラルを見て頬を赤く染めているし。男性のほとんどは四人を見てただただ驚いている。

男女問わずにケータイで五人を写メで撮っている。ちなみにこの場にいた冬月学園の生徒のほとんどは、ラル、ルナ、リアスの三人が学園に来た瞬間からファンクラブをつくり、そのファンクラブの会長などになったそうだ。

>スーパー<

駅前のカフェでお茶を飲み終わった五人は夕飯の買い物をしにスーパーに来ていた。

「品揃えが中々良いなこの店」

「そうだね。ラーちゃん」

俺たちは今夕飯の買い物をするためにスーパーに来ている。この店の中々品揃えが良く、比較的値段が安くなっていた。

これなら一ヶ月は近く持つだろう。買い物かごを見ながら内心でほっと息をだす。

人間界の食べ物に興味があるルナやマナ姉、フィリア姉はやたら物を買おうとするし、料理がダメなりアスは読書用の歴史本を買いに行っとなかなか戻ってこなかったので書店に迎えに行けばナンパにあってるし。

もちろんナンパをしていた男性には制裁を食らわせたが……。

「ラル君ごめんね。ついつい珍しくて」

「私も次から気をつけてます……」

「すみません。なかなか断れなかったので……」

ラルの笑顔には老若男女問わず人を一時停止させることが可能のようだ。

時間停止の笑顔（後書き）

今回からラル視点でいきましたがどうでした？

これからも頑張りますのでよろしくお願いします！

m
（
m

冬月学園初日？（前書き）

まず初めに、すみませんでした！ m（ m

友達に頼まれて新しく書き初めた小説に時間をかけすぎて更新がいつも以上に遅くなってしまいました。

こんなダメ作者ですが……これからよろしく願います！ m（

） m

冬月学園初日？

あれから一日がすぎ、朝となった。

あれから夕飯を食べる際にルナやリアス、マナ姉、フィリア姉がなぜか俺におかずを食べさせようとするし、しかもあーんって無理やりやるんだからな…

だけどルナの料理の腕はかなり上がったな。

リアスはいかわらず卵焼きと目玉焼きしかつくれないけど…

まあ、人間界初日には賑やかだったかな？

朝は朝で夕飯みたいになったけど…

〈通学路〉

今俺たちは冬月学園に向かっているんだが…

「なぜ腕を組んで歩いている？ルア、リアス？」

そう今ルアが右腕、リアスが左腕っといったぐあいに腕を組んでいる。

「だーって、初めてだから不安で、リアちゃんだってそうでしょ？」

「はい…。やっぱり初めてですから。ダメですかラーくん？」

「ダメ、ラーちゃん？」

二人が顔を上げて聞いてくる。

「いや：ダメじゃないんだが、そのなんと言うか…」

腕を組んでいると目立たないか？

「「?????」」

二人が首をかしげている。ああ、なんかどうでも良くなってきた。

「いや…。なんでない気にしないでくれ二人共」

結局、俺が折れるしかなかった。

「しかし、なんか不思議な気分だな」

「なんで？ラーちゃん」

「いや、おれが十歳ぐらいの時に人間界に来たことがあるって昔、話をしただろう？その時来た街が此処なんだ。だからなんか懐かしくてな…」

約七年前。まだじいちゃんが生きていた頃に俺はこの街に来た。記憶の中の街と今見ている街はやっぱり違っている。

「やっぱり懐かしいですか？ラーくん」

「ああ、懐かしいな。大分街の感じは変わったけど、空気だけは昔

のままだな、七年前の時と変わらない」

「そっか。ねえラーちゃん。七年前に人間界来た時に誰かと友達にならなかったの？」

「うん、なんでルナ？」

「やっぱり友達とか知り合いがいたら心強いし」

「そうですね。昨日このあたりを見て回りましたが、まだ知らない場所がありそうですし、そういった人が一人でもいたらルナちゃんが言った通りに心強いですね」

「友達か？この街にいた時に四人組の女の子と遊んだことがある程度かな？」

ぴきっ

「「女の子と遊んだ？」」

「ああ、何でか知らないけどすごく仲良くなって。異世界に帰るまで毎日のように遊んだな」

「その女の子可愛かった？ラーちゃん」

「今はどうか知らないが結構可愛かったな。それで…二人共なんか腕がきつくなったのは気のせいかな？」

さっきから両腕がいや音をたてているんだが…

「気のせいだよ。ねーリアちゃん」

「そうですね。ルナちゃん」

昔とはいえ、ラーちゃん（くん）と遊んだ女の子がいたとは…奪われないようにしなきゃ。

>冬月学園<

21A組

冬月学園が誇る四人組の美少女がいるクラスである。彼女達を見るため毎日ファンクラブの会員が来て賑やかになっているのだが、今日はいつも以上に賑やかになっている。

「ねえ、今日このクラスに異世界から留学生が来るらしいよ」

「いきなり何？ 凜」

「だから今日留学生がこのクラスに来るの！ しっかり聞いてよ百合ちゃん！」

「はいはい…わかったわかった…そういう話はレイナやラフィナとして私眠いから」

「むー！ わかったわよ。 レイナちゃん、ラフィナちゃん私の話聞いてー」

「朝からテンション高いんだよ凜。少しはラフィナみたいにほのぼのしてろ。話は聞いてやるから」

「あらあら。私ってそんなにほのぼのしてるかしら？」

「なにごとに、慌てないでのはほんとした空気だしといてなーに言ってるんだよ。…それで留学生が今日このクラスに来るのか凜？」

「そーなんだよレイナちゃん！偶然職員室で聞いてね。この感動を伝えたくてね」

「感動って、どういうことですか。凜ちゃん？」

「それがね。留学生三人の内の男子生徒が銀髪らしいのよ。銀髪って言ったらあの男の子の思い出してちゃて、それで昔話でもしようかなって」

「感動はどこにいった。感動は。それじゃあ、いつも通りに話すだけじゃんか」

「それがね。昨日駅前の喫茶店で銀髪の美少年がいたそんなんだよ。だからもしかしてあの時の男の子かなーって思ってる」

ガシッ

「でかしたわ。凜！」

「百合ちゃん起きたんだってか手痛いんだけど…」

「ああ！あの時の男の子が来るなんて。運命だわ」

「まだ決まったわけじゃないと思うわー」

「レイナ静かにしなさい。これは決定したことなの！運命なの絶対なの！」

「あらあら元気ですわね百合さん」

「元気にもなるわよラフィナ。ああ早く来ないかな！」

百合（ちゃん、さん）が暴走し始めた（ぜ、ちゃった、ましたわ」

＜学園校門前＜

「くしゅん！」

「ラーくん風邪ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど…」

いやな予感がするな…

冬月学園初日は波乱の幕開けのようです。

冬月学園初日？（前書き）

短いですが、今月中にもう、一話や二話を更新するので、許してください！

m (m

冬月学園初日？

＞職員室＜

「いやー。異世界から留学生が来るとは聞いてたけど、こんなに美形だと思わなかったよ」

「「「ありがとうございます」」」

俺たちは今、職員室にいる。ホームルームの三分前なので生徒たちの声は聞こえない。

「それにしても大丈夫かね？ 仮にも異世界の姫の護衛がグローバルくん一人で」

「心配しなくても大丈夫です。学園長先生。自分はルナⅡスローフイールド。リアスⅡウォーカー。両姫殿下の騎士を幼少時代からやっているのですから。たとえ、上位の暗殺者が来たとしても撃退するだけの技術と力が自分にはあります」

「そうかい？ なら良いんだが、では君たちの担任に後は任せるとしよう。一ノ瀬先生。頼みましたよ」

学園長先生は近くにいた一人の女史に告げた後に俺たちから離れた。つた。

「きみたちの担任になる。一ノ瀬^{いちのせ}弥生^{やよい}よ。教科は数学A。よろしくね」

「「こちらこそよろしくお願いします」」

一ノ瀬先生の第一印象としては、優しいそうなのが感じがする先生だった。

「じゃあ、いきましようか。ホームルームも始まっちゃうしね」

俺たちは一ノ瀬先生のあとをついていき、職員室をあとにした。

>21A<

「じゃあ、生徒には私から先にあなたたちのこと紹介するから。名前呼んだら入ってきて」

「「わかりました」」

なぜだろう？この教室の前に来てからいやな感じしかない。

「ーと、いうわけで今日から留学生が来るから。じゃあ入ってきて」
ぼーと、しているうちに紹介が終わったようだ。

「行こうかルナ。リアス」

「うん！」

「はい！」

ガラガラ、扉を開けた時から俺の日常がより賑やかなった。

冬月学園初日？（前書き）

展開が速すぎ…。

本当にダメ作者だ…。

ラルⅡグローバルの呼び方

ルナ↓ラーちゃん

友達は基本ちゃんづけ。

リアス↓ラーくん

友達は基本ちゃんづけ。

マナ、フィリア↓ラル君

目上の方は様づけ。友達はさんづけ。

凜↓ラルちゃん

友達は基本ちゃんづけ。

百合、レイナ↓ラル

友達は基本よびすて。

ラフィナ↓ラルさん

友達は基本さんづけ。

冬月学園初日？

＞昼休み・屋上＜

あれから教室に入って、大変だった。

自己紹介が終わったと思ったら、ずっとこちらを見ていた女子生徒がつつこんできたのだから。

俺も見たことがあるな。と思っていたが、まさかあの時の女の子だったとは、しかもつつこんできた。百合の話を聞くと他の三人も同じクラスらしく、改めて再会をはたした。
その時に彼女たちに。

「綺麗になってるから、わからなかった」

と言ったら四人が四人とも顔を真っ赤に染めて下を向いてしまった。

あれはなんでなんだ？

それから。俺、ルナ、リアス、凜、百合、レイナ、ラフィナの七人でお昼と一緒に食べようとなって、屋上に来ているが…なぜ、こうなった？

「「「「「あーん」「」「」「」

そう。俺は今、六人になぜか、あーん。でせまられている。

なぜ、このような状況になったかというと。

>数分前<

「ラルちゃんたちのお弁当美味しそうだね」

「食べてみるか。凜？まあ、今回は俺が作ったからそんな美味くはないと思うが…」

「食べる、食べる！」

すごく、食いついてきたな。そんなに食べたかったのか？

「わかった、わかった。はい、あーん」

「」「」「えっ！」「」「」

どうした皆？なにを驚いている。

「どうした凜？食べないのか？」

ブンブン！

凜が顔を振る。

「だったら、口をあけろ。ほれ、あーん」

「あ、あーん」

パクっ。モグモグ。

「どうだ、美味しいか？」

「うん！すごく美味しいよ……あっ！」

「どうかしましたか、凜さん？」

いきなり、声をあげた。

凜の隣で食べてた、ラフィナが声をかけた。
みんな、凜の方を向いている。

「…これって、間接キスだね？」

一瞬で静かになった。しかも、こちらを見ていた。生徒たちも、キスという単語に反応して静かになっていた。

「……まあ、そうだな」

意識すると、かなり恥ずかしくなった。

なぜ、俺は凜にぁーんをしてしまった？

ルナやリアスにもぁーんしないのに。久しぶりに人間界に来て、感情が高ぶっているのか？

ああ、ルナやリアスが驚いたのは、俺がめったにしない。ぁーんを凜にしたからか。

「おい、ラル…」

みんなが固まっている中でレイナがいち早く、動きだした。

「…なんだ、レイナ？」

「なんだ、その…あ、あーん…」

「ちょっと、待て。なんのつもりだ。レイナ？」

レイナが俺にアーンをしてきた。上目づかいで。

「いいから、食べろ！それとも、俺のものはたべられないのか！」

「いや、その今の凜の話聞いてなかったのか？これって、間接キス
だろ？」

「いいんだよ！俺は別にラルなら間接キスしても…」

『なんだと？あのレイナさん…』

『お姉様…なんで？』

ほら他の生徒が…お姉様って何！

「「「「ずるーい！私もラル（ラーちゃん、ラーくん、ラルちゃん、ラルさん）に食べさせたい！」」「」「」」

「待ってみんな！そんなこと言われても…」

「「「「「あ、あーん」「」「」「」」

>現在<

といったことがあり、今にあたる。

「「「「「あ、あーん」「」「」「」

「もう、勘弁してくれー！」

結局俺がみんなにあーんを、させることにより事態はおさまった。

ううっ…お、お腹が…

久しぶりに戦い以外で恐怖をおぼえた。

冬月学園初日・放課後？（前書き）

部活の遠征に行っており更新が遅れました。 m (m

次はもっと早く更新するように頑張りますので
これからも姫の騎士をよろしくお願いします！ m (m

冬月学園初日・放課後？

＞冬月学園・放課後＜

俺たちは今、家に帰っている。行きとは違い人数が三人から七人に増えているが…。

昼休みに六人にあーん攻撃をされた後に再会を祝うことになり、俺とルア、リアスの人間界の住居に招待した。

なんか四人に言われて、俺が料理作ることになったけど、たぶん姉さんたちが作り始めているな。時間的に。

俺はケータイを開いて時間を確認した。もう五時をすぎ、六時に近い時間だ。

「なあ、時間が時間だし。たぶん姉さんたちが夕食を作っていると
思うんだけど？」

ぴくっ

「「「姉さんたち？」」「」」

俺の言葉に凜、百合、レイナ、ラフィナが反応した。さっきまでニコニコっと笑顔で話していたが、もう笑顔ではない。いや、笑顔なのだが目が笑っていないというか、笑っている笑顔とは違う感じがする。

「あ、ああ。俺たち三人以外にも人間界こうちに二人姉さんが来ている。本当は姉さんたちを含めて四人来るはずだったんだけど、ちよつとした都合で二人だけになったんだ」

「言っても本当のお姉さんたちじゃないんだけどね」

「リアスが言うとおりでな。本当の姉さんではないんだけど、昔から面倒を見てくれてね。じつの姉のように慕っているんだ」

「」「ふーん……」「」

（（（（ってことはその二人のお姉さんたちはラルちゃん、ラルさん、ラル×2のことを私たちより知ってるんだ。敵は彼女たちだけだと思ったんだけど……））））

まずい！なぜか四人が不機嫌だ。どうすればいい！

>数分後<

「ラーくん。家着いたよ？」

リアスに言われてから家に着いたことに気づいた。

四人の機嫌を直そうとずっと考えていたら着いたようだ。
ちなみに四人はまだ不機嫌だ。

「まあ四人共入ってよ。まだ人間界に来たばかりだからそんなに良
いおもてなしは出来ないだろうけど」

俺は四人に告げながらドアを開いた。それが今以上の状況におちい
る扉とは知らずに……。

冬月学園初日・放課後？（前書き）

今回は少し長いかな？

自分自身の文才の無さに、枕を濡らす毎日。

これからも姫の騎士をよろしく願います！ m (m

冬月学園初日・放課後？

「「「ただいま」」」

「「「「お邪魔します」」」」

俺たち七人は玄関からリビングへといった。

「「おかえり」」

キッチンで夕食を作っている時間帯なのに姉さんたちは、リビングのソファでゆったりとテレビでニュース番組を見て紅茶を飲んでいた。

「姉さん。夕食は作ったよね？」

「「うん。一通りは」」

この二人は双子でもないのに、同じ答えをくれた。

「ちょっと、待ってて」

俺はみんなをリビングに置いてキッチンへと向かった。

＞キッチン＜

「一通りは出来ているけど……これはないな」

キッチンのテーブルの上にあるのは、四人のサラダとスープ。あと、異世界では一般的なパンと果物だった。

「いつもこんな感じだけど、人間界こうちに來た時ぐらい豪華にすればいいのに」

俺と姉さんたちは基本的に夕食はあまり食べない。やはり朝食に多く食べた方が体には良いからだ。

「仕方ない。今回はこれ（夕食）をベースにもう少し豪華にしてみるか」

俺はキッチンからリビングに戻った。

>リビング<

ガチャ

俺はリビングの扉を開けた。

「すまない。みんな今から夕食を作り直すから、ちょっとした間待って……く……れ……」

俺がリビングに入るとリビングは戦場になっていた。

ルナとリアス、マナ姉さんとフィリア姉さん。
凜と百合、レイナとラフィナ。といった四人対四人の図が出来上がっていた。

「ど、どうした？みんな」

俺は背中に冷や汗を流しながらたずねた。

「「「「「「なんでもないよ。ラーちゃん（ラーくん、ラル君×2、ラルちゃん、ラル×2、ラルさん」」」」」」」

みんなは笑顔なのだが、笑顔じゃない。先ほど同様に目は笑ってないし、笑顔の下には冷たい何かがある。

「ね、姉さん。今日は昔馴染みの彼女たちがいるから、姉さんたちが作った夕食つ、作り直してもいい？」

俺は戸惑いながらも姉さんたちに聞いた。

「私はいいよ。フィリアは？」

「私はラル君の作った料理ならなんでも」

「わ、わかったよ。じゃあ作り直してくるよ」

俺はその場の空気に耐えきれずにキッチンに向かおうとしたが、

「待って、ラーちゃん（ラルちゃん）」

幼なじみのルナと昔馴染みの凜に止められた。

「な、何。ルナ、凜？」

「ラーちゃん（ラルちゃん）は今まで一緒にいた人と昔に知り合って再会した人。どっちが大切？」

ちよつとまって！それってこの場リビングにいる人達、全員に当てはまるよね！
落ち着け、ラルⅡグローバル！ここで間違った言葉、答えを言った
ら更に事態は悪化する。

しかも皆こっち見てるし…。

「お、俺は…」

ゴクリ

「俺は今が大切だと思う。今まで一緒にいた人や再会した人は今は一緒に居て同じ時間を過ごせるから」

ど、どうだ？

俺は今できる精一杯の答えを出した。

はあー。

どこからか、ため息が聞こえた。

「「「「「「「やっぱり。ラーちゃん（ラーくん、ラル君×2、ラルちゃん、ラル×2、ラルさん）だね（ですね）」」「」「」「」

八人はガッカリしたような安心したような表情でため息を吐きながら俺を見ていた。

「今から夕食作り直すからみんな待ってくれ」

俺はなぜ、リビングが戦場になったか疑問に思いながらキッチンへと向かった。

>リビング・ラルが一度、キッチンに向かったあと<

ガチャ、リビングの扉が閉まった。

「あなたがラルちゃんのお姉さん達ですか？」

凜が人間界に住んでいて、ラルと昔馴染みたちの言葉を代表して言った。

「そうだね。ラル君からは姉さんっていわれているよ。あと、私はマナⅡフランベルク。これからよろしくね」

「私はフィリアⅡハーヴェイ。以後よろしく願います」

「マナさんにフィリアさんね。私は鈴宮凜。隣にいる茶髪の娘は仙道百合。赤髪の娘はレイナⅡフレイルで金髪の娘はラフィナⅡクロスロード。ちなみに私たちはラルちゃんとは昔馴染みで今はクラスメイトよ」

両方とも自己紹介をしたが、その裏では相手の情報を知ろうとする戦いがおこなわれていた。

「ところでここにいる、みんなに聞きたいんだけど、私を含めた八人はラーちゃんに好意をもっている。それはいい？」

ルナの言葉に八人全員がコクリとうなずいた。

「それで聞きたいんだけど、ラーちゃんは私たち幼なじみ四人と貴女達昔馴染み四人。どっち側に好意をもっているか知りたくない？」

ルナの言葉にみんな耳を傾けていた。

実際。どっちも幼なじみ、昔馴染みというアドバンテージを持っているため、現状はどちらに好意をもっているかラル自身に聞かなければ分からないのだ。

幼なじみは一緒にいたというアドバンテージを持ち、昔馴染みは幼少時代のため印象に残るというアドバンテージを持っているためである。

「そんなの俺たちの方がラルには好かれているはずだぜ！」

「それはなんでですか？ レイナちゃん」

「だってさ、俺たち四人に何年もの間こんなに想いを寄せられてるってことは、ラルにもその分印象があるってことだろ？ だから俺た

ち四人の方が好意はもたれているはずだ」

「自分自身がそうだからって、ラーくん自身がそうとは限らないでしょ？」

「あ、それもそうか！」

「レイナちゃん。あなたはおバカさんなんだから、ちょっとだまろうかな？」

「おバカさんってなんだよ！おバカさんって！おい、凜！」

リアスとレイナが喋っているのは、このままでは負けてしまうと感じとった、凜がレイナを怒らせた。

「まあ、あのおバカさんはほっといて話をつづけましょうか？」

凜はギャーギャーいつているレイナを一切無視した。

無視されたレイナはラフィナに、あらあらと言われながら頭を撫でられて慰められている。

「こればかりは、ラル君に聞かないわからないですね？」

その場はラルのお姉さんでるフィリアが結論を出した。

その言葉を発端に幼なじみ四人組と昔馴染み四人組にわかれた。

「ラーちゃん（ラーくん）が私たちを選んでくれる。必ず！」

「弟であるラル君は私たちお姉さんを選ぶはず！」

「それはこちらのセリフよ！ラルちゃん（ラル）はこっちを選んでくれる！」

「ラルは俺たちを選ぶ！」

「ラルさんは、私たちを選んでくれるはずですわ」

この後ラルが修羅場に遭遇した。

冬月学園初日・放課後？（前書き）

遅くなってすみません！

m (m

部活や風邪にかかったりして更新出来ませんでした！
では、本文どうぞ！

冬月学園初日・放課後？

俺が女性達の修羅場をなんとか、やりすごし今は皆で夕食を食べている。

俺は昼食の時に学習したため、夕食ではあれの二の舞にならないようしていた。

昼食の時は久しぶりに会った四人が俺の周りに来ていたが、さすがに夕食をいつも通りになった。

ちなみにルナとリアスが俺の隣でマナ姉、フィリア姉が向かい側の席で、凜と百合がマナ姉の隣、レイナとラフィナがフィリア姉の隣である。

夕食を姉さん達が作った料理を俺が手直しをしたので、姉さん達の料理と言っても良い。

「これ美味しい！お昼のお弁当も美味しかったけど、やっぱり出来たての方が美味しい」

凜が昼食の時みたいにいきおいよく食べている。

「凜。口元に汚れがついてぞ」

「うん？ありがとう百合ちゃん」

「だけど、昼間も思ったけど凜はよく食べているな」

疑問を感じていたので、俺は凜に訊いてみた。

「私は料理が作るのが苦手だから、食べる専門なんだよ。あんまり太らないしね」

「料理が苦手ってレベルかあれ？」

「まあ、そうですわね…」

レイナとラフィナが小言でつぶやいた。

「料理が苦手ってレベルじゃないって、どういうことだ？ レイナ、ラフィナ」

「凜の料理は：「言っちゃだめー！」な、なんだよ凜？ いいじゃねえか、いつかはばれるんだしよ」

凜が席を立ち、必死にレイナを止めようしているが、

「凜さんが料理を作ると、なぜか真っ黒になってしまんです」

騒いでいる中でもよく通るラフィナの声が騒いでいる二人の動きを止めた。

「ラフィナちゃん、それは言わないでよー」

凜は涙目になりながらラフィナの方を向いている。

「言われなくては、ちゃんと料理を勉強しなさい」

「いつも赤点ギリギリの百合ちゃんに言われたくはない！」

「なっ！それは今関係ないでしょ！」

凜と百合が言い争いを始めた。

「ねえ、ラーくん。私も料理、苦手だけど真っ黒になったことあったかな？」

「いや、無かったな。せいぜい焦げ目だな、あと調味料を間違えるくらいだ」

リアスが俺に訊いてきた。今の話を聞いて心配になったのだろう。

「しかし、それほどだと、リアスと一緒に料理特訓をしたほうがいいな」

また料理の腕を上げないといけないな。

「すみませんでした。ラルさん、まさかこんなことになるなんて思いもしなかったんですの」

ラフィナが責任を感じたのか、席を立て俺に謝ってきた。

「いや、いいんだ。ラフィナ賑やかになったしね。……ん？」

俺はラフィナの顔に違和感を感じた。

「ラルさん？そんなに見つめられると恥ずかしいですわ」

「ちょっとじっとしていてくれ」

俺はラフィナの口元に手を伸ばした。

「ラ、ラルさん？」

ラフィナが顔を赤らめているが気になるんだよ。

ひよい、パクっ。

「……ん、取れた」

俺はラフィナについていた、夕食の残りを食べた。

「ラーちゃん？な、何やってんの」

「何って、食べたただけだが？」

ルナが驚いた顔をして訊いてきた。

いつの間にか騒いで凜と百合も静かになりこっちを見ている。

「何かおかしかったか？」

よくわからず俺は皆に訊いた。

「ラルくん。あなたって自覚ないの？」

「自覚ってなに？ どういう意味…姉さん？」

皆があきれたような顔をして一斉にため息をはいた。
ラフィナがぼーとしていたが。

＞夕食後＜

「はぁー、疲れた。なんだったんだ？」

あのあと、皆から休日と一緒にでかけることを、半強制的に約束された。

「だけど、いつに一緒にでかけるんだ？ 順番がどうのとか言ってたけど？」

いっそのこと皆で、でかければいいのに。

「それにしてもいい湯だな」

俺は皆に言われて今お風呂に入っている。なんでも、女の子はお風呂が長いかららしい。

「人間界に来てまだ初日なのに、賑やかになったな。異世界じゃ考えられないな」

異世界では基本的に仕事ばかりだった。ルナとリアス、二人の専任せん騎士んきしなっってから修行や事務仕事の日々で一ヶ月家に帰らないってこともあったしな。

「普通の高校生活を送れるのは、神帝と魔帝むすめばかのおかげだな。感謝せねば」

ごそごそ。

「ん？脱衣所から音が…」

ガラッ

「「「「「「しつれいします（しますわ、するぜ）」」」」」」」

皆が入ってきた。

今は俺がお風呂に入っている。そしてたった今、八人全員がお風呂に入ってきた。よし逃げよう、いやな予感がする。

俺が風呂からあがり逃げようとするが、

「「逃がさないよ。ラーちゃん（ラル×2）」」」

動きの速いルナと百合、レイナに腕を捕まれてしまった。

「いやだ！何か、いやな予感する。離してくれー！」

叫びながら逃げようと試みるがリアスとマナ姉、フィリア姉が捕縛魔法を使い、体が動かない。しかも出入口には凜とラフィナが立っている。俺を逃がす気はこればっちもないようだ。

こうなったら、

「転移魔法発動！」

シュン！

詠唱をしなくても転移が出来るように修行をしていて良かったな。逃げた！って皆の声が聞こえたが俺は聞かなかったことにした。

＞転移先・ラルの部屋＜

シュン。

「ひ、ひどい目にあった…なんなんだ一体？」

女性達の行動を疑問に感じながら俺は濡れた体をタオルで拭いた。

「それにしても、人間界は賑やかで良いな…」

濡れた体をタオルで拭きながら、昨日の朝に立てかけていた写真を見ながら呟いた。

「父さん、母さん、じいちゃん。俺は人間界楽しくやってるよ。少し賑やかすぎるけどね…」

ハハッと笑いながら、変わらない笑顔を写している写真に話しかけた。

今はもう写真の中でしか会えない三人に…。

静寂から絶叫へ（前書き）

これを書いているうちに、これは違うんじゃないか？と思っている自分がいました。

ダメ作者が書く駄文ですが、楽しんでくだされば幸いです！ m（
し m

静寂から絶叫へ

俺達三人が冬月学園に通い始めて一ヶ月が過ぎた。

初めの頃は少しにぎやかになっていたが、今は落ちついてきている。皆で昼食を食べたり遊んだりしていた。

冬月学園初日の放課後に約束されたデートはまだ行ってないが…。

＞冬月学園・21A＜

「スポーツ大会？」

「明日から始まるから、今日は出場メンバーを決めるらしいよ」

朝、三人で学園に来て席に座ると百合がやってきて話をしてきた。

「スポーツ大会をするのはわかったが出場メンバーを決めるのはなぜなんだ？」

「それは、大会で良い成績を残せば冬月祭。つまり文化祭で、特別優先枠を取ることができるの」

「特別優先枠？なんだそれは？」

「特別優先枠はえーと…何が特別になるんだっけ？」

「特別優先枠を取ることによって、使うことのできる文化祭費を他

のクラスより多く貰えたり、お客さんがより多く来る場所を取ることができること」

「ありがとう。凜」

「お礼を言われるほどじゃないよー。テヘヘ」

百合と喋っていると凜が特別優先枠について教えてくれた。

「なるほど。だからレイナがあんなに張り切っているのか」

俺は視線をレイナ達に向けた。

「ぜっーたい！出場メンバーに選ばれてやる！」

「レイナさんでしたら、出場メンバーに選ばれますわ」

「そんなんだけどよ。俺としてはやっぱり少し心配なわけよ。まあ去年みたいにラフィナの分まで頑張ってやるよ」

「期待しますわ。レイナさん」

「おう！任せておけ」

レイナの周りに赤く燃える炎が見える。

「燃えてるね…」

うん。

ルナの一言にレイナとラフィナを除く、いつものメンバーがうなづいた。

「ところでスポーツ大会の種目はなんですよ」

「たしか。男子の団体競技は野球にバスケットボール。女子はソフトボールにバドミントン。個人競技は男女共に室内プールで水泳だったと思うな」

リアスの質問に凜がこたえる。

「野球にバスケ。水泳か…俺は水泳かな？泳ぐの好きだし」
ピクッ

なんか八人から視線を感じる。俺が水泳しちゃだめなのかな？

＜ホームルーム＞

「みんな知っていると思うが、明日からスポーツ大会だ。うちのクラスの男子は野球部にバスケット部がいるからいいが、問題は男女の水泳なんだが…そのことについて皆に知らせることがある。今回の水泳の優先枠がうちになった」

ホームルーム。一ノ瀬女史の一言にクラス中が静かになった。

「「「「「な、なんだってー!?」「」「」「」」

静寂から一変。学園を揺るがすほどの絶叫が我が二ーAから響いた。

「ゆ、百合。優先枠がそんなにすごいのか?」

「すごいなんてものじゃないよ!優先枠は全学年のうちの二クラスしか選ばれないだから」

百合も信じられないのか、笑顔で喜んでいる。

「みんな静かにしろ。嬉しいのはわかるが、問題があることを忘れるな」

決して大きくない、一ノ瀬女史の声に皆が静かになる。一ノ瀬女史の声はどんなにうるさくてもよく聞こえるから不思議だ。

「うちには水泳ができる奴がいらないんだから、たとえ優先枠があるからと言っても油断ならない。優先枠で決勝にはあがれるけど、そこで負けてしまっただけは意味がない」

優先枠は無条件で決勝にまで進めるものようだ。
なら、それは有効に活用しようか。

「先生。自分が水泳に出ます」

俺は腕を上げて一ノ瀬女史に告げる。

「他に出たい奴がいなければいいが、…他に出たい奴はいるか？・
・いないな。では水泳はラルⅡグローバルに決定」

よし！久しぶりに泳げるぞ。…けどなんでみんな水泳に出たがらないんだ？

ラルは気づかなかった

八人がラルの泳ぐ姿を見たいがためにクラスの男子に尋常ではない
殺気をおくっていたことに。

「あとは女子のソフトボールにバドミントンなんだが、出る選手が
何人か決まっているから言うぞ。ルナⅡスローフィールド。仙道百
合。レイナⅡフレイル。この三名はどちらの競技にも出てもらうか
ら覚悟しておけ」

ホームルームで選手選出は終わり。明日からスポーツ大会が始まる。

スポーツ大会？（前書き）

あとがきも見てください。

スポーツ大会？

「いっくぜー！」

翌日になり、俺達は今レイナが投手をやっているソフトボールの試合を見に来ていた。

ソフトボールの選手に選ばれているのは、レイナとルナ、百合であるが、ルナはまだ出ていない。なんでもレイナとルナの二人で投手をやるだからだそうだ。

「オラッー！！」

またレイナが打者を三振にさせた。レイナの細腕からあり得ないぐらいのスピードボールが繰り出される。

「すごいですね。レイナちゃん」

「そのとおりだな。あの細腕には、どのくらいの力が備わっているのか興味を抱くよ。それにそれを難なく捕っている百合にもね」

隣からリアスが感心したようにつぶやいた。実際あんなスピードボールを投げるレイナもすごいが、それを捕る百合も抜群の運動神経を持っている。あれを打てる奴はこの学園にいるのだろうか？

「レイナちゃん、ファイト！です」

いつもは声を出さずにほのぼのとしている、ラフィナがレイナに声援を送っている。

「あ、また三振です」

リアスのつぶやきに、グラウンドに目をやると、レイナがまた三振をとっていた。

「これでもう五つ三振か、だけど、あんなに飛ばして大丈夫が？」

「大丈夫ですわ。レイナちゃんは体力がありますから」

「いや、そうゆうわけではなくてな」

ラフィナがどうして？といった具合に首をかしげた。なんかこのやりとり、ほのぼのするな。そんなことを考えていると、

「そういえば、凜さんはどちらに？」

「ん？確かに見たらないな、凜がどこにいるか知らないかラフィナ」

「凜さんでしたら、ベンチにいらしゃると思いますわ」

「「ベンチ？」」

俺とリアスが首をかしげる。凜がベンチ？だけどあいつは運動はダメだったはず、なのになぜ？

「凜さんが監督をしているんです」

ラフィナが微笑みながら、こたえる。俺達は、ああ。とうなずいた。

確かに凜は子供っぽい感じではあるが、あれでも学年のテストでは大体は高得点を取り、学年順位ではいつも十位ぐらいには入るって
ると言っていた。

「確かに、頭が良いから監督には持ってこいだな。あいつは作戦考
えるの得意だし」

前にみんなで戦術のゲームをやった時に、凜は俺をのぞく五人に意
表を突く作戦をやり、圧勝した。

「ラーくん。ルナちゃんの出番ですよ」

「ありがとう、リアス」

ルナの出番がやってきた。今は五回の表、最後の回だ。なぜ五回し
かやらないかというと、時間短縮だからだそうだ。優先枠をのぞく
全十四クラスで一回戦をやるから、仕方がないといった具合だ。明
日は決勝を含めて、三試合をする。

初日は一試合だけして、明日に備えるといった感じだ。

「ルナ！勝つてるとはいえ、油断するなよ」

レイナがベンチからルナに声をかける。

三点差。もしかしたら、逆転されかもしれない点差だ。ルナはそん
なレイナに笑うだけだった。

「ルナなら大丈夫だな」

ルナは異世界トップレベルの投手ピッチャーだからな。

「狙うは三者三振！」

ルナが声を上げる。

「ルナがんばれー！」

「「ルナちゃん。ファイトですー！」」

俺達はルナに声援を送る。ルナはそれに応えるように、二者を三振に取り最後の打者を迎える。

一球目。インコースのストレート、見逃し。

二球目はソフトボール特有の浮き上がるボール。振りはするが当たらず。

最後の一球。ど真ん中のストレート。相手は振るが、打者の手元で沈み三振。

直後に歓声。二ーA、二回戦へ。

>試合終了後<

「よっしゃー！勝ってきたぜ！」

「ラーちゃん。勝ったよー」

ルナ、レイナ、百合、凜が俺達の方にやってきた。

「おつかれ」

「「お疲れさまです（ですわ）」」

四人に労いの言葉をかける。ルナとレイナは満足そうに笑っているが、

「どうした？百合、痛めたのか？」

百合が手をさすっている。一人であれだけの球を受けていたから無理はないだろうが。

「さすがに、手を痛めたよ。二人ともすごい球投げるんだから」「だけど、手を痛めただけで良かったな。あれだけの球を受ければ普通はもっとひどい状態になるぞ」

俺は、百合の頭をなでる。

「ん……」

百合はいやな顔をせずには撫でられ続けてくれる。目を細めて柔らかい表情をしている。

「あー！百合ちゃんずるーい！私も撫でてラルちゃん！」

凜が騒ぎ始めた。俺に撫でられてもたいしたことないだろうに？その後俺は六人全員が満足するまで頭を撫で続けた。

スポーツ大会？（後書き）

今回はスポーツです！

どうだったでしょうか？

ラルが一步ひいたような感じでしたが、最後はいつも通り。ほのぼののつていいよね。

P・S ユーザ以外の方でも感想を受けるようにしましたから、感想を書いてください。悪い点ばかり書くと作者が泣き、執筆速度が今より遅くなるので、ご注意ください。

スポーツ大会？（前書き）

まず初めにすみませんでした！ m (m

月初めに部活の県大会。その次の週は体育祭。また次の週は検定。といった具合だったので更新が遅れてしまいました。

本当にすみませんでした！ m (m

こんなダメ作者ですが、これからもよろしく願います！ m (

し m

あと感想をください！ m (m

スポーツ大会？

一回戦を勝った翌日。俺達二ーAは決勝戦をむかえていた。
前の試合は投手のルナとレイナが一点も与えないピッチングをやり、
捕手の百合が先制ソロホームランを打つなどの活躍により順調勝ち
上がった。

「これに勝てばうちはかなり特別優先枠に近づくな」

女子の競技は男子の競技よりも点数が高い。これは冬月学園に所属
する女子生徒が比較的運動よりも勉強に力をいれているためである。
逆に男子の競技の点数は高くない、これは男子生徒が勉強よりも運
動に力をいれているからである。

「ラーくん始まりましたよ」

リアスが教えてくれる。グラウンドに目をやると試合が始まっていた。
二ーAは後攻だから今は守備に入っている。投手のレイナ。捕手の
百合がいる。それは今までとは変わりはないが、今回は決勝戦なの
で今まで前半はベンチにいたルナが一塁手ファーストにいる。

これは決勝戦の相手が冬月学園ソフトボール部三年生がいるク
ラスだからだ。（九人中六人がソフトボール部）

「レイナちゃんは大丈夫でしょうか？」

隣にいるラフィナが心配そうに呟く。

ラフィナの話を知ると去年も今回と同じようにレイナのいるクラスと今の三年生、去年の二年生と決勝戦を戦ったそうだが、去年の結果としてはレイナのサヨナラタイムリーで勝ったそうだが、去年と今年では状況が違う。

今の三年生は去年の決勝戦を負けたことにより、今年こそと意気込んでいる。

逆にレイナは去年勝った相手であるために、表面上は油断していないと思っても必ず心のどこかで油断している。加えて今回は自分の他にも頼りになる、友達であるルナや百合がいる。油断しなければいいが……。心の中で呟いた。

「悪いが今回も勝たせてもらうぜ」

レイナが今まで以上に速いボールを投げるが、カキーン！

一番打者のソフトボール部に打たれてしまう。

「なっ！！」

驚愕の表情をするレイナ。打球はライト方向に伸びていく。

「ライトー！！」

キャッチャー
捕手の百合が指示を出す、無情にも打球はフェンスを越える。

「打たれた……しかも先制点……」

応援している俺達にも分かるぐらいにレイナは落ち込んでいた。打

球が消えていった方向を見ながら…。

「レイナ、大丈夫？」

「レイナちゃん…」

マウンドに選手が集まってくる。レイナは落ち込んでいたが、自分の顔を叩いて気合いを入れ直していた。

「打たれたのは俺のせいだ。スピードは速かったと思うけどコースが甘かった…勝った相手だから油断してた」

レイナは自分自身で慢心していたことに気づいていた。その後の打者を三振にして攻撃に移る。

「さあー！獲られた点は取り返す！この回に同点…いや逆転してやりましょう！」

百合の声が響くがその回の攻撃では点は入らなかった。一番ルナ。三番レイナ。四番百合。といった打順だったがその三人にはフォアボール。それ以外は三振といった具合だった。

「ちくしょー！勝負しろよー！」

レイナが相手に叫んでいるが相手はそれを無視している。…なんか感じ悪いな。

「ちくしょー！あいつら！勝負しろよ！」

「レイナちゃん」

「なんだよ。凜」

「相手の作戦に乗っちゃダメだよ！…たぶん相手の作戦はレイナちゃんを怒らせようとしている。怒れば無駄な力がボールに入ってコースが甘くなるし、体力が落ちるし」

「相手の挑発に乗るなってことか？」

「そういうこと。相手の言葉を気にしないで、気持ちを落ち着かせる」

凜が子供を落ち着かせるようにレイナをなだめる。レイナが深呼吸をして自分自身を落ち着かせている。

「さあっーて反撃といきますか？」

凜の言葉にメンバーがうなづく。

「よっしゃー！いくぜ！」

さっきとは違い。すっきりとした表情をしているレイナ。

「また、手が痛くなりそう」

ため息をつきながら、どこか覚悟を決めた顔をした百合。

「疲れたなら、私が代わってあげるよ」

ほのぼのとした空気を出しているルナ。それでいて、その空気は他とは違っていた。

＞最終回・二ーAの攻撃＜

「点差は初回の一点のままか…」

あれからお互いに点は入らなかった。レイナとルナの二人であの初回の一点からはランナーを一人も出さなかった。　　だか、あいてもレイナ、ルナ、百合にはフォアボール。しかも確実にバットに当たらない場所に投げる徹底ぶりだ。

「このまま、レイナちゃん達は負けてしまうのでしょうか？」

不意にラフィナが訊いてきた。その表情はかたい。ラフィナとレイナは特に仲が良い、だからラフィナはレイナに勝って欲しいと心から思っている。

「大丈夫だろ。選手の三人もそうだが、監督の凜が何も考えていな

いはずは無い。だから心配するな」

ラフィナの頭を撫でながら応える。ラフィナは気持ちよさそうにしているが、隣とグラウンドから、ものすごい視線を感じる。

隣を見ると良い笑顔のリアス。

グラウンドを見ると笑っているルナ、百合、凜。そして睨んでいるレイナ。

レイナ以外は笑顔だが、それには何か冷たいものがある。

試合再開。主メンバーが動きださなかったので、約三分何もなかった。なぜ審判の先生は何も言わなかった？

打者は八番から、今まで出塁をしていない人だ。だが確実に何か起こる。凜が八番と九番に何か喋っていた。

八番から始まるこの最終回、逆転しなければ優勝は無い。

八番が打席に立ち最後の攻撃が始まる。

八番は初球バントの構え、投手をダッシュ。だがバットを引く。それがツーストライク、スリーボールになるまで続き、最後の球はきつちりバントを決める。これが八番、九番と続く。

「凜の狙いはこれか」

「狙いですか？」

「ああ。あれは地味に体力を減らすからな、しかも最終回。今までの試合を一人で投げ続けた投手だから、これは効くぞ」
「なるほど」

リアスに伝える。だが、それだけじゃ点は取れない。何を考えているんだ凜は？

「今度こそ」

ルナが打席に立つがフォアボール。

二番は今までファールで粘ってきたソフトボール部の一人。そろそろヒットが欲しいところだが、たぶんヒットを打つであろう。彼女は今までわざとファールを打ち続けたように見えるから。
カキーン！

ほらね。やっぱり打った。これで逆転の舞台は整った。

「よっしゃー！こい！」

レイナが叫んでいるがフォアボール。

レイナが勝負しろよー！と叫んでいるが相手はもう次の打者に目を向けている。

四番・百合。

最後はやっぱり四番と勝負をしたかったらしい。

「さあ。決めますか！」

百合が打席に立つ。投手の目を見る。ピッチャー あれは覚悟を決めた目だった。

初球は外角低めストレートのボール球、見逃し。二球は内角低めのストライクのストレート。

百合がバットを振るが空を切る。

相手は低めを意識して投げている。詰まらせてアウトを取りたいようだ。

三球はまた内角低めのストレートだが、一つ分外れてボール。次は、

「っ！」

ど真ん中のストレート。百合がバットを振るが手元で内側に曲がりファール。

「シュートボール」

今まで低めのストレートを投げ続けた、このタイミングで変化球。流石の百合でもとらえなれなかったようだ。

「追い込まれましたね」

「大丈夫ですわ。レイナちゃん達が負けるはずありませんわ」

リアス達にも焦りが見える。それ以上に百合にも焦りが見えるがな。

ピッチャー
投手が最後の一球を投げる。
百合がバットを振り抜く。

直後に歓声。マウンドには膝をつき、うつむく投手の姿があった。
ピッチャー

＞試合終了後＜

応援していた二ーAの生徒は優勝したことを喜んでいた。
四人は表面上は喜んでるように見えるが、心から喜んでいるようには見えない。

「やっぱり。不満か？」

「うん。最後に勝負してくれたのはいいけど、最初は勝負してくれなかったから」

四人を代表してサヨナラタイムリーを打った百合が応える。

「まあ、しょうがないさ。相手はそこまでしても勝ちたかったんだからな」

みんなの顔はやはり固かった。

「そんなに落ち込むなよ。明日のバドミントンはそんなこと起こらないから。それに今日は勝ったんだから夕食は俺が美味しいものを作るよ。作って欲しいものはあるか？」

ピクッ

「俺ハンバーグ！」

「オムライスが食べたーい！」

「私はこの前食べたお寿司が食べたいな。ラーちゃん？」

「私はグラタンでー」

みんながそれぞれ好きな食べ物を言っていく。ちなみに上からレイナ、百合、ルナ、凜の順番だ。先ほど違い、皆の表情が明るくなった。

「わかったよ。丁度材料が家にあるから、帰ったらすぐに作る。リアスとラフィナは？」

「「えっ？」」

「何を驚いているんだ？」

「だって、頑張ったのはルナちゃん達ですし…」

「私たちには何もないと思っていたので」

「そんなことしたら不公平だろ？家に帰ったら姉さん達にも聞かないと」

「「やっぱり。ラーくん（ラルさん）らしいですね」」

二人は誰にも気づかれないぐらいの声でつぶやいた。

ラル達が家に帰った後は、ラルが皆のリクエストの料理をつくり冷蔵庫の食料が空っぽになったのは、また別の話。

ラルの闇夜（前書き）

遅くなってすみませんでした！ m
いつもより長いので勘弁してください！ m
感想待っています！ m

ラルの闇夜

すう、すう。

リビングでは騒ぎ疲れたみんなが眠っている。

ソフトボールで優勝したが、どこか浮かない表情をしていたから好きな料理を作ってやると言ったら、元気になってくれた。

やっぱり女の子には笑顔が一番だ。

それで家に招待して夕食を食べた。みんな俺の料理を美味しいと言って食べてくれた。

そのあとに、姉さん達が飲む年代物のお酒（ワイン、ウイスキーなど）を間違ってルナとリアスが出してしまい、それを飲んだしまったみんなは酔ってしまい、大変な状況になってしまった。

お酒を飲まなかった俺とすでに大人であるマナ姉、フィリア姉は大丈夫だったが、

>一時間前<

「にゃー!」

ルナの一声：いや一鳴きにより始まった。

「ど、どうしたルナ？」

突然猫の声で鳴きだしたルナに困惑しながらも、それを顔には出さずに近づく。

「にゃー！」

近づいた瞬間に押し倒された。しかも押し倒された、その一瞬にルナは魔法を使い漆黒の猫耳と猫しっぽを付けていた。猫好きの俺にはたまらない……って、ちがーう！

「どうしたんだ、ルナ？俺の料理がやっぱり不味くておかしくなかったのか！？」

ルナの肩をつかむが、猫化したルナは首を傾げて「にゃー？」と鳴くばかり。

「リアス！ルナが猫になった！」

猫化したルナはもう俺では止められなく、リアスに助けてを求めるが目線の先には、純白のうさ耳とうさしっぽを生やしている、幼なじみのお姫様の姿だった。リアス…お前まで…。

猫化したルナ。うさぎ化リアス。

なんなんだこの空間は？

俺が絶望に染まっていると、ルナが俺から離れリアスに行き、そのままリアスに、

「にゃーー！（ごはんーー！）」

「っ！（いやー！）」

襲いかかった。猫化して野生の本能が出てきたらしい。猫ルナに遊ばれているうさリアス。具体的にはほっぺたを舐められたり、腕や耳を甘かみされている。

「にゃー（美味しいー）」

「っ！（たすけて!）」

そして、そのまま猫ルナの行動がエスカレートしていき、うさリアスの服に手をかけてって!?

「落ちつけー!?それはダメだルナ!」

「にゃー!（やだー!）」

猫ルナをうさリアスから引き離し説得するが、猫ルナは俺の腕の中で暴れる。

「こら! 暴れるんじゃない! おとなしくしろ!」

「にゃー! にゃー!（やだー! ごはんー!）」

先ほどよりも暴れる猫ルナ。くっ! 思ったより力が強いな。仕方がないこれを使うか。生成魔法!

ぽん。猫じゃらし生成。

「ほらほら、猫じゃらしだぞー」

「にゃ！（猫じゃらし！）」

猫じゃらしを左右に振り、猫ルナの注意をうさリアスからはなす。

「にゃ！にゃ！（まて！まて！）」

よし、注意がそれた。この隙に睡眠魔法を。

「眠れ…」

魔力を込めた目をルナに目線を合わせる。

「にゃ…にゃにゃ…（ねむい…おやすみ…）」

ふう。なんとかなったな。だが、うさリアスは隅っこでガタガタ震えている。うさリアスには猫ルナは刺激が強すぎたようだ。

「な、なんなんだ？もう」

今の状況についていけない。何が起こった？

「ラル君すみません。ルナ様リアス様が間違ってお酒を出してしまつて、皆さんそれを飲んでしまつて酔ってしまったようです」

「酔つた？みんなが？」

「はい。私とフィリアは大丈夫だったんですが、みんなが…ははっ姉さん達は申し訳ない表情をさせながら、蓋の開いたワインを片手にもっている。」

「それ、みんなが飲んじゃたの？」コクリつと同時にうなづく姉さん達。

「じゃあ、いま静かにしてる他のみんなも…」

「「はっ…ごめんなさい…」」

くいくいつ。

姉さん達が謝ると同時に、服の裾を誰かに引っ張られる。

「ラルー飲んでる？」

完全に酔っているレイナが絡んできた。脇にはラフィナが控えている。

その二人に共通して言えることは顔が赤く、目がとろーんっとしていることだ。

普段怖い目つきのレイナが、こんな感じに柔らかい目を見ると新鮮だな。

ラフィナはいつもと同じ感じがするが、酔っているはずなので油断できないな。

「ラル。飲め」

レイナが手に持っていたコップを突き出してきた。少しアルコールの匂いがする。飲まなきゃいけないのか？レイナは睨んでるし、ラフィナは微笑みを浮かべているだけだけ。

「さっさと飲め！それとも私のは飲めねえのか！」

「いや。そういうわけでは…」

苦笑いをしながら、コップを遠ざける。レイナはそれが気に入らなかったのか、睨んできた。柔らかい目で睨んできても、新鮮だからかわいいだけだな。

「そうだよな…。普段から男っぽい俺からは飲めないよな」

「あ、あのーレイナ？」

「そうだよな。俺よりかわいいラフィナ達の方が、いいよな。……ぐずっ…」

「な、泣くなよ。レイナは俺の目から見てもかわいい女の子だし、他の人から見てもかわいい女の子だから」

「ぐずっ。本当に…」

レイナが目には涙をためて上目遣いで見てきた。いつもと違い柔らかい目をしているからギャップが…。

「ああ。だから心配するな、レイナはかわいい」

「あ、ありがとうラル。…それより俺眠くなちゃたから寝るわ。おやすみー」

そう言ってレイナはリビングのソファーに横になった。だがラフィナがじっとこっちを微笑みながら見ている。さっきと違い冷たいも

のを纏わせながら。

「あ、あの。俺何かしました？」

少し怯えながらラフィナにたずねる。

「ラルさん。あなたはレイナちゃんを泣かせました。なので制裁を行います。拒否権はありませんので、そのつもりで」

「えっ？」

ラフィナが言った事を理解するまでに少し時間がかかった。そしてその時間をラフィナは見逃さなかった。腹部に痛みが走り、次の瞬間には俺は天井を見ていた。

「ラルさん覚悟！」

ラフィナが追撃をかけるが、戦闘モードに変わった俺はラフィナの動きを先読みし、攻撃を避け先ほどのルナ同様に催眠魔法を使い眠らせる。

「ぐっ！ね、ねむい…」

ラフィナを催眠魔法にかかりやすい体質なのか、ルナ以上の速さで眠りへついた。

「なんなんだ本当に…」

レイナが少し泣いただけで攻撃をしてくる、なんて予想もつかなかったぞ。

この分だと部屋の隅にいる凜とテレビを見ている百合に話掛けるのが怖いな。

「うえええええ！ラルちゃーん！」

怖いと思った矢先に部屋の隅にいた凜が泣きながら俺に抱きついてきた。頬には軽く赤みがかかっているので酔っているのだろう。

「どうした凜？」

子供をあやすように凜の頭を撫でる。凜を徐々に落ちつきはじめている。泣き止んだら上目遣いで顔を近づけ、

「キスして」

潤んだ瞳で頼んできた。

キスして欲しいのか、凜を酔うとキスしてっと頼むようだ。………そんなことできるかー！

「あ、あの凜さん。キスというものはお互いが好きな人同士でやる愛情表現なわけです、付き合ってもいない者同士がやるものではないのですよ？」

目をそらしながら、酔っている凜に説明をする。凜は俺の説明がよくわかっていないのか首をかしげている。そしてある一言。

「私はラルちゃんことが好きだから問題無し！」

「待て凜！それは酔っているからだ！そもそも女の子が軽々しく好きなんて言うんじゃない」

凜の肩を揺らしながら説得。

「わかった。好きなんて言わない」

凜は少し悩んだような仕草をしたが納得くれたようだ。

「好きなんて言わない。私はラルちゃんを愛してる！」

喜んだら衝撃的な一言をもらいました。

お酒の力ってすごいね。

「キスしてーラルちゃん！」

目を閉じて唇を突き出してくる凜。

くっ！かわいいぞ！だがキスをするわけには…いかない。

凜の対処に困っていると背後から近づいた百合が俺と凜の間に入り、そのまま凜を押し倒した！？

「きゃ！ラルちゃん強引だね……って百合ちゃん！？」

押し倒された凜が照れながらも目を開けると目の前には百合。俺が押し倒したと思ったのだから実際に押し倒したのは百合なので凜は驚いている。

だが、そんな凜にかまわず酔っている百合は凜の体のあちこちを触っている。

「うーん。凜の体冷たくて気持ちいいー。だきまくらにしたいー」

若干ろれつが回っていない百合。いつもは体を触るなどのスキンシップをしない百合なのでかなり酔っていることがわかる。

「むー！どいてよ百合ちゃん！私ラルちゃんとキスするんだから！」

「いいじゃないか、そんなこと。それよりだきまくらになってくれない？」

凜の言葉を聞かずにだきまくらになることを要求する百合。普段ならありえないことだけに見えていて飽きない。

「ラルちゃんとキスしたあとでね！」

「いや。それほど待ってないから今すぐベッドに行こう」

嫌がる凜を引きずりながらリビングをでる百合。凜は短い会話の中で無駄だと悟ったのか黙って連れていかれる。百合に連れていかれる凜が首根っこを捕まれている猫に見えたのは俺の錯覚だと思いたい。

＞約十分後＜

「終わった…」

床に座り安堵のため息をつく。食器やお酒の空びんを片付けに手間取っていたから少し疲れてしまった。

ルナとラフィナは俺の睡眠魔法で、レイナは自分で、凜は百合に連れていかれて。部屋の隅にいたリアスは同じ魔族であるフィリア姉さんが自室に連れていき寝かしつけたそうだ。

酔っていたからといってまあれは変わりすぎだろ。

お酒の凄さを改めて知ったな…はあ。

ため息をつき全身の力を抜く。そして家の周りに最強硬度の結界を張る。

「マナ姉さん。気づいたと思うけど侵入者がきてる」

「ついに来たわね。その行動は意味をなさないので…」

マナ姉さんは神族式の祈りをまだ見ぬ敵に送る。

「姉さん。フィリア姉さんにも一応侵入者に来たことを伝えてくれる？もしものことがあると困るからさ？」

「わかったわ。ラル君気をつけてね…」

俺の身体を抱きしめるマナ姉さん。人間界ではこのようなことは初めてなので、心配してくれているのだろう。

「大丈夫。すぐに帰ってくるから」

俺はマナ姉さんを身体から離し、転移魔法で敵の元に向かう。

> 転位先<

町外れにある平地に転位する。いきなり現れた俺に驚く刺客達。通常の転位魔法は個人差はあるが約三キロから七キロぐらいだから、町の中心地にある家からこの町外れにある平地に普通は転位できない。

単純に計算しても二十キロはあるから、通常の魔族、神族は転位できない。そう、通常の、普通の者なら……。しかし、強力すぎる魔力を持っている俺にはあまり関係ないことだ。

ちなみに神帝、魔帝の最大転位距離は約百キロだ。（転位魔法の術式を使った場合）

刺客達は突然現れた俺に驚いていたがすぐに動揺を消して俺に向かってくる。

数は十人。前衛に七人。後衛三人。

前衛の四人は刀を三人は槍を持ち俺の急所を狙い斬りついてくる。それゆえに軌道はよみやすい。

俺は手に魔力を込めて七つの刃を斬り落とした。

「グローバル流体術・斬手^{せきしゅ}」

手に魔力を込め刀を作り出す。

元々は手や腕を強化するもので昔からある強化魔法だったが当時のグローバル家当主がそれを改良し今の形になった。

一度修得すればあとは魔力を込めれば込めるほど切れ味が増し、イメージを変えれば盾。身体中に魔力を纏わせれば鎧にもなる、万能型の魔法といえるものであった。

「俺はあまり人を傷つけない。だからおとなしく捕まってくれないか？」

殺気を込めながら刺客達に問う。一瞬動きを止めたがそれでも体術で攻撃をしてきた。後衛の三人も魔法を放ち攻撃に加わってきた。

「それが答えか……なら覚悟しろよ」

目に魔力を込める。攻撃範囲は俺から半径十メートル。

「グローバル流魔術・幻魔^{げんま}」

刺客達は声もあげれないまま、その場に倒れこんだ。

幻魔。相手に最も苦痛の幻を見せ精神を一時的に破壊する。回復時間は個人差はあるが約二日間。今回は弱くしたので目が覚めるまでの十時間ほどで回復するだろう。

刺客を捕縛魔法で縛りあげて術式をほどこしていた。異世界の刑務所に送り込んだ。手紙を刺客の一人に握らせていたので事情は分かるはず。

「やっぱり、甘いな」

一言呟き、転位魔法でその場を去る。

＞自宅・玄関前＜

玄関の扉を開け、リビングに向かう。

ガチャ。

「ただいま」

リビングの扉を開いた。

そこにはずっと待っていた姉さん達の姿があった。

「大丈夫だった？」

フィリア姉さんが心配そうな顔をして訊いてくる。

「見ての通り。ケガ一つありません。それよりもみんなは眠ってたよね？」

「心配しなくても全員寝ているわ」

「そう、良かった。戦っていたなんて、知られたくないからね」

みんなには争いをして欲しくない。世界の裏側を見て欲しくない。それは俺の役目だから。

「ラル君。刺客の数と目的は？」

「数は十人。目的は多分ルナとリアス」

「やっぱり、反神帝、魔帝の人たちかな？」

「単純に雇われた奴らかも知れないよ、マナ姉さん」

「そうね。…あとで神帝様や魔帝様に報告しなければならないわね」

マナ姉さんはリビングから出ていった。

異世界の病院で治療をしている、二人に報告しにいったのだろう。

「ラル君。魔力は大丈夫？」

「大丈夫だよ。あんまり使わなかったから」

「無理はしないでね。あのような惨劇を起こさないようにしないと
いけないのだから」

「わかってるよ。わかってる…」

あれは二度と起こしてはならないものだから。

「ならいいけどね。……それよりラル君。私身体が寒いんだけど、
暖めてくれない？」

フィリア姉さんが抱きついてくる。それも逃がさないといった具合
に力を込め、胸を腕に当てながら。

「ね、姉さん？あ、当たってる」

「んー、何が？それよりもまた、たくましくなったんじゃない？」

「鍛えているからね。それよりも離れてくれないの？」

「いいじゃない。異世界あっちに比べたら、昼間に学園にいつている分会わなくなったんだから。甘えさせても」

姉さんはそう言ってもっと力を込める。
そうして困っていると、

ガチャ。

リビングの扉が開いた。

「な、何をやってるのかな二人とも？」

笑顔のマナ姉さんが般若を後ろに従え仁王立ちで、ソファーに座っている（抱きついている）俺たちを見ろしてきた。

「マナ：あんた報告してくるの速いよ」

ぼそりと呟くフィリア姉さん。それが聞き取れたのかマナ姉さんの口元が、ぴくりと動く。

まずい！？あれは本当に怒っている時の仕草だ！

「フィリア。ラル君が迷惑してるから今すぐ離れなさい」

「断るわ」

ゆっくりとした口調でマナ姉さんに、抵抗するフィリア姉さん。

「…もう一度言うわ。離れなさい。フィリア」

「いいじゃない。抱きついたって。最近は二人の姫殿下の監視がきつくて甘える暇がなかったんだから」

そう言って頭を胸に押しつけてくる。フィリア姉さんの香りが漂ってくる。

「ん？…それにラル君は嫌がっていないし、頭撫でてくれる」

いつの間にかフィリア姉さんの頭に手を置き撫でていた。

なぜだろう？姉さんの香りを嗅いだら撫でたくなってしまった。

「くっ！学生時代は氷姫と言われたフィリアがこんなに甘えん坊になるなんて、思いもしなかったわ」

マナ姉さんが睨みながら、フィリア姉さんに問いかける。

「学生時代は学生時代。今はラル君のそばにいられたら良いわ。昔は弟みたいだったけどね。それに甘えたいならマナも甘えればいいじゃない？ラル君なら大丈夫よ」

フィリア姉さん。何が大丈夫なんですか？今の状況だけでも大丈夫じゃないですけど。

「付き合っていない男女が抱きついて甘えるなんて私は認めません！それにラル君甘えすぎなのよ！」

「本音は？」

「私もラル君に甘えたい！……って、何言わせるの！？」

マナ姉さんとフィリア姉さんが何か言い争いを始めたが、結局のところマナ姉さんも甘えたいってこと？

フィリア姉さんをゆっくりと離しマナ姉さんに近く。

「な、何？ラル君」

ぎゅう。

俺はマナ姉さんを抱きしめた。

「ラ、ラル君！？」

「姉さん。甘えなければ甘えていいよ。姉さんだって女の子なんだから」

「ラ、ラル君。……きゅう」

「ね、姉さん！？」

頭から湯気を出して動かなくなるマナ姉さん。
どうしたんだ！？

動揺している俺からマナ姉さんを剥がすフィリア姉さん。

「んー？これはラル君成分の許容量を超えちゃったかな？」

ラル君成分？なんなんだそれは？説明をして欲しいな。

フィリア姉さんが頭から湯気を出してマナ姉さんの額に手を当てて様子を見ている。

「ゆっくり寝てれば治るでしょ。私はマナをベッドに寝させてくるから、戸締まりお願い」

マナ姉さんに魔法をかけてリビングから出るフィリア姉さん。
リビングに一人になり、床に座る。

今日は魔法を使った。極力、魔法は使わないと決めたのに使ってしまった。守るためとはいえ、使ってしまった。

ゲホッ。

口に手を当てる。そこには真っ赤に染まった手があった。

あまり時間が残っていないな。計画を実行しなければならないのか？

手に付いた血を拭いながら、心のどこでそんなことを考えてしまう。

>朝・リビング<

起きてからキッチンで朝食の準備をしているとみんなが起きてきた。
だが、その表情は暗い。

「み、みんな。何かあった？顔色悪いけど？」

顔色が悪い学生六人はそろって一言。

「「「あ、頭が痛い」」」

「「頭が痛いですー」」

…………二日酔いには気をつけてください。

今日のスポーツ大会は休みだな。学生に連絡を入れなきゃだな。

俺は重くなった体を動かしながら皆が食べる、お粥を作りはじめた。

スポーツ大会？（前書き）

遅くなってしまい。本当にすみませんでした！ m（ m
言い訳を言わせていただくとリアルが忙しかったです！

こんなダメ作者ですがこれからもよろしくお願いします！ m（

m

スポーツ大会？

六人の二日酔いが治り今日はスポーツ大会最終日。

二日目のバドミントンは二日酔いのため休んだ。ルナ、レイナ、凜が主要メンバーだったため二回戦で負けてしまって一ノ瀬女史に怒られたのは記憶に新しい。

そして今日は俺が出る水泳。

今回二ーAは全学年の内一クラスしか選ばれない優先枠を取り決勝までの予選をフリーパスできる。

水泳はそれぞれクラスから四人が出場する。これは男女別のため合計は八人になる。種目は自由形・平泳ぎ・バタフライ・背泳ぎの四種目である。

俺は平泳ぎにでることになっている。

これには理由がある。なんでも自由形だと、あまりにも王道すぎてつまらないと、背泳ぎに出場するルナと自由形に出場するレイナ、バタフライに出場する百合が言ってきたからだ。

そんな三人に勧められ俺は平泳ぎに出場することになった。自由形に出場しなかったと思ったのは俺だけの秘密だ。

そして、俺の出番がやってきた。

結果としては、俺の圧勝だった。水泳部員もいたはずなのだが、俺が百メートルを泳ぎ終わったところで他の選手は折り返したところだった。

何気ない顔で皆の元に戻ると顔を真っ赤にして、俺の見ていた。水着を着ているだけだから、おかしいは無いはずだよな？

まあ、身体中に魔法をかけているから違和感を感じているだけかな？

皆には、この傷だらけの体を見せたくないから魔法で見えないようにしているけど。

実際はラルの裸同然の姿に恥ずかしがった恋する乙女達だった。ちなみに他の男子生徒は水泳部員には、やはり勝てず三位や四位にとどまってしまった。

その結果、今の順位は三位。二日目のバドミントンで上位にいなかったのが響いているらしく一位ではなかった。

「三位か…。最低でもあと二つは一位を取らないと総合優勝はないな」

単純に計算しても一位を一つ取ると今の一位の点数になり、二つ取ると逆転する。さらに今、一位のクラスの取れる最大の点数を考えると確実に勝つためには、一位を三つ取るのが望ましい。だから…。

「頼むぞ！ルナ、レイナ、百合。二―Aが逆転するには二つ、優勝するには三つ一位を取らないといけない」

これから出番を迎える三人に激励を送る。

優勝がかかっているので、三人共真剣な表情だ。

特に、いつも俺に甘えてくるルナが気合いが入っているようで、ほつぺたを軽く叩いている。

百合はいつもポニーテールにしている長い髪を帽子の中に入れ、体をほぐしている。

レイナは…。

「おっしゃー！狙うはトップだー！」

叫びなら目にも止まらないぐらいの速さで蹴りを繰り返している。
気合いは十分に入っているようなので大丈夫であるだろう。

あ、蹴りの風圧でプールの水が割れた。

うん。見なかったことにしよう。プールが割れたのを見て、引きつった笑顔をした選手なんて見てない。

>水泳女子の部・決勝戦<

水泳の泳ぐ順番はメドレーと同じで、バタフライ・背泳ぎ・平泳ぎ・自由形クロールとなっている。

なので三人の出る順番は百合、ルナ、レイナである。

優勝するには三つの種目で一位を取らないといけない。百合、レイナの出る種目は水泳部がいるとは言え二人の運動神経、身体能力を考えれば一位は取れる。だが問題はルナが出る背泳ぎである。

無論この種目にも水泳部員が出ているのだが、その水泳部員が一筋縄ではいかない相手なのだ。

一年生の時からインターハイに出て、上位入賞し、二年生では全国一位になるなどの快挙を成し遂げ、現水泳部の主将の三年生の一ノ瀬さん。

なんと一ノ瀬女史のお姉さんの娘さんだ。

一ノ瀬女史はそんなことは関係無いと言ったぐらいに自分自身のめいっこを睨んでいたが。

そして決勝戦が始まった。

最初は百合が出場するバタフライ。これは俺の予想通りに百合が二位と大差をつけ、一位になった。

そして：一番の難所である。背泳ぎが始まろうとしている。ルナは第三レーン。一ノ瀬さんは第四レーン。偶然にも隣同士になってしまった。

これでは、いやでも相手が目に入ってしまうので、緊張してしまうかもしれない。だけど今の俺には応援することしかできない…。

パンツ！

音が鳴り選手が一斉に泳ぎ始めた。先頭になっているのは、やはり一ノ瀬さん。その少し後ろにルナがいる。

二人はさらに加速していき、三位以下をどんどん離していった。折り返しをして、最後の五十メートル。

一ノ瀬さんが加速するが、ルナがそれに付いていけずになり、そのまま一ノ瀬さんが一位になった。

その後は平泳ぎはクラスメートの女子が二位と健闘し、レイナはその強靱は脚を使い他の選手の追隨を許さないまま一位となった。

＞決勝戦・終了後＜

「ごめん…。負けちゃた」

見るからに落ち込んだルナが近づいてきた。他のメンバーはあまりのルナの落ち込みように声がかけれない。

「ルナ。前を向け」

「でも、ラーちゃん。私、勝てなかったんだよ？」

ルナの落ち込んだ声が響く。それはけっして大きな声では無かったが良く響いた。

「勝てなくて、良いじゃないか。ルナは一生懸命頑張ったんだから、それに泳いでる姿は誰よりも綺麗だったよ。それに落ち込んでるルナより、いつもの明るいルナの方が好きだよ？」

俺は落ち込んでるルナの頭を撫でる。ルナが落ち込んでる時はこうして頭を撫でながら落ち着かせる。

昔、父さんや母さんが生きていた時によくやってくれた。

誰かを落ち着かせる時は自分の温かさを人に伝えることが一番だつて聞かされたから。

だから誰かを落ち着かせる時の癖になっている。

「ラーちゃん、ありがとう！そうだよ。いつまでも落ち込んでる

のは私らしくない!」

ルナが咲いたような笑顔を見せてくれた。ルナは笑顔が一番似合っている。

「それにラーちゃんが綺麗って言うてくれたしね!」

ルナが一言。そう、その一言により俺の背後に五つ殺気が生まれた。逃げなきゃ!と思い、脚に魔力を込め逃げようとするが、体が動かない!

よく見ると体に細い魔力の糸が絡み付いている。捕縛魔法の一種であるが、糸のかなり細くてきているので、上級の魔族、神族だとわかる。そして、それに該当するのはこの場では一人だけ。

「リアス。俺が何をした?」

「何もしていません。ただ、じっとしててください」

リアスは笑っている。目以外が。

「じっとしてたら、絶対なにかやるだろ! レイナなんか無言で足を蹴りだしているぞ!」

レイナが先ほどのプール以上の威力を繰り出している。その横にいるラフィナが笑っているので怖さが倍増している。そのラフィナからあふれ出ている魔力で周りの温度を肌で分かるくらい下がっている。

「頼む！ルナ助けてくれ！」

「ごめん…ラーちゃん。私じゃ無理…」

唯一味方になりそうなルナに助けを求めるが拒否された。ルナの両親にいまする凜と百合が原因だと思いたい。

ほら、そんなに強く肩を握るからルナが涙目になってきてしまった。

「マナさん、フィリアさん、今から学園に来てくれますか？ラーくんの拷問を手伝っていただきたいので、……いえ、ラーくんがルナちゃんに綺麗と言ったので、……はい。ではお願いします」

リアスが捕縛魔法を使いつつ携帯電話で姉さん達に連絡した。

「待てリアス！なぜ姉さん達を呼んだ！？」

姉さん達は異世界の王の秘書だけあって、その魔力と魔法は異世界でもトップクラスだ。しかも、二人の捕縛魔法はいつも仕事をさぼろうとする、神帝・魔帝を捕まえるので、かなりのものだと分かる。それはリアスはもちろんルナだって知っている。

「なぜって、決まっているじゃないですか？逃がさないためですよ」

くっ！万事休すか！こうなったら、前回同様に転位魔法で！

「逃がしませんわ。ラルさん」

ラフィナに捕まった!?

さっきまでレイナの隣にいたのに!?

「待て! 話せば分かる! だから無言で近づかないでくれー!」

レイナが準備体操は終わったと言わんぐらゐに無表情で近づいてくる。その強靱な脚を一步ずつ近付けてくる。

「ラルさん。観念してください」

ラフィナが耳元でささやく。いつもはおっとりした声で場を和ませしてくれるのに、今はそれが無性に怖い。

こうなったら、あれをするか……したくなかったけど。

「ラフィナ、少しいいか?」

「なんですか? ラルさん」

「その、当たっているんだが……」

「当たっているって……あっ」

ばっ！

ラフィナは俺から離れた。先ほどラフィナは俺を羽交い締めのように捕まえていたので、その……女性特有の柔らかい物が背中に当たっていた。女性ならそれを指摘すれば離れてくれると思ったが上手くいったようだ。

「ラルさん！不謹慎ですわ！」

「そうでもしないと離れてくれないだろ？」

ラフィナが顔を真っ赤に染めて少し声を強くして言ってくる。
かわいいな。と思ったが背後から、とんでもない負のオーラと殺気が飛んでくる！？

「やっぱり胸かー！ー！！！！」

そう叫びながらレイナがものすごい勢いで向ってくる！！
俺なんかやった！？
そんなことを一瞬考える。しかし、その一瞬の間にレイナが迫り蹴りを繰り出そうとするか……

ピンポンパポーン。

当たる瞬間にチャイムが鳴った。レイナもそれに耳を傾け、動きを止めた。

『スポーツ大会の結果が決まりましたので、発表いたします』

校内放送が流れる。

どうやら、難を逃れたらしい？今回は運が良かったとしか思えない。

『第三位。三ーC組！続いて第二位の発表ですが、今回のスポーツ大会は同点のクラスが二つあったため。第二位がいません。

そのため、これより体育館で優勝決定戦を行いますので、これから呼ぶクラスは直ちに集合してください。二ーA組！三ーD組！各クラスの人は今すぐ体育館に集合してください』

俺は殺気を出し続けるルナ以外の五人に恐怖を感じながら体育館に向かう。

体育館に向かう途中で二つの知っている魔力を学園に張っている境界が感知した。

姉さん……少し速すぎませんか？それに魔力に殺気が混じっています。

優勝決定（前書き）

毎度ながら更新が遅れてしまい、すみませんでした！ m（ m
こんなダメ作者ですが、これからもよろしく願います！ また、
感想をください！

P V・十万突破しました！ 読者に感謝です。

優勝決定

『これよりスポーツ大会優勝決定戦を始めます！』

『『『『おおおーっ！』』』』

放送部の部長の一言に歓声が湧く。

優勝決定戦は3ーD対2ーAの一騎討ち。クラスから代表を一人だし一つのお題をクリアする。

それに勝利した人がいるクラスが今回のスポーツ大会の優勝だ。

『2ーA代表・異世界の騎士ことラルⅡグローバル！』

クラス代表。俺になったんだよ。さっきまで、あんなに怒ってた皆まで、いまは最前列から応援だよ。

部外者の姉さんたちもいるし。大丈夫か、この学園？

『3ーD代表・学園最強スイマー。一ノ瀬^{らん}蘭！』

まあ、女性だろうと勝負には勝たせていただく。それに…さっきの水泳。ルナの仇を射たせていただく。

『では、優勝決定戦のお題を発表します！ お題は…男女逆転です』

男女逆転？ なにそれ、スポーツ関係ないだろ？

『簡単に説明しますと、女性は男装。男性は女装してもらいます。その後は会場のみなさんにどちらが良かったか投票してもらい優勝

を決めさせてもらいます』

女装するのか、十三の時の任務以来だな。

＞控え室<

何だこれ、衣装部屋？

それに……

「あー、これ可愛い！」

「ルナちゃん。これも可愛いですよ」

キヤーキヤー言いながら衣装を見る。ルナとリアス。

「もふもふー。かわいいな。このうさぎ」

「あいかわらず子供ね。これで成績いいんだから。嫌になるわ」

巨大な白いうさぎのぬいぐるみを抱きしめる凛。それを見ながら、ため息をつく百合。

「これ、良いわね。いい素材使ってるわ」

フィリア姉さんが黒いスーツを触りながら鑑定する。ちなみに姉さんは黒いスーツしか持っていない。

「これ、かわいい」

マナ姉さんが白い帽子をかぶりながら笑顔を振りまいている。

そして、レイナは

「オラッーッーッー!!!」

なぜか衣装部屋にあるサンドバックを蹴り続けている。まあ、レイナらしいと言えbraらしいのだが…。

「レイナちゃん。すごいですわ!」

蹴り続けているレイナを当たり前のように見ている、ラフィナが俺は怖い。慣れるて身近にあって一番怖いものだと思う。

それを見ながら衣装を調べてみる。うーん、前の任務のときは、まだ声が高かったから少女の服で良かったけど、今回は背も高くなつたから少女の服はダメだな。

「うーん、どうしたものか」

腕を組みながら悩む。

ルナたちがパーティーの時に着るような服がいいのか？

悩んでいるとある服が目止まった。皇宮でもよく見るし日本には、これの格好した喫茶店があると聞くし大丈夫だろう。

その衣装を手にとり試着室に入る。

変身魔法をつかい髪を長くする。やっぱり短いより長い方が女性らしいからな。

着替えてから試着室を出る。出るまで騒がしかったが出たら静かになり俺のほうを見ている。

「すみませんが、こちらは関係者以外は立ち入り禁止なのですか？」

フィリア姉さんが警戒するように訊いてくる。

あれ？俺だって分からない。自信はあったけど、これは少し……

「姉さん、おれだよ」

『!?!』

八人が表情は驚きに染まる。そして…

『ええええええー!!!!』

見事に驚きの声がシンクロする。

>体育館<

『これよりクラス代表、二人よる男女逆転を発表してもらいます!』

体育館のステージ脇にある控え室から放送の声が聞こえる。みんなからは「女の子しか見えない」と言われたが、男である俺にそれはないだろう。

『では、初めに3ーD代表。一ノ瀬さん!』

向こう側の控え室から男装をした一ノ瀬さんが出ていく。
長かった髪をまとめ、学ランを着てステージに立つ。

『おっーと、一ノ瀬 蘭さん。学ランを着ての登場だ!普段は制服のスカートなので、ギャップがあるぞー!』

放送部の声に合わせるように歓声が湧く。俺から見ても男装を似合っ
てはいる。それでも、まだ女性だと分かる。
これで、俺が出ていったらどうなるか?

『では、次に2ーA代表。ラルーグローバル君に登場してもらいま
しょう!』

名前が呼ばれ控え室から出て、ステージに立つ。
今まで、うるさかったが出てきた瞬間それがウソのように静かにな
った。

放送部長も目を見開いて驚いている。

『……あの、本当に男子生徒ですか?』

「正真正銘の男子生徒です」

放送部長が数秒固まったあとに俺に質問する。

いまの俺の姿はメイド服を着て、ネコミミをつけている。それと姉さん二人に軽くメイクをされた。どうせ、やるなら徹底的にっ、言われたのでイヤイヤながらメイクをうけた。

『おおおおーっ！』

歓声が湧いた。男子生徒の声を中心に…

『私の姉になってくださーい！』

『私のお姉さまになってくださいー！』

『私にはレイナお姉さまが…でも！』

訂正。一部の女子生徒もいるようだ。

『会場全体が熱くなっております！彼は本当に男なのか？きれいすぎて、女である私が嫉妬しつとくるで狂ってしまいそうです！』

狂わないください。

『では、これからラルⅡグローバル君に一言しゃべってもらいましょう！』

脇にいた放送部員にマイクを渡される。

一言か……。せっかくだし、声を変えてしゃべってみるか。

『みなさん。一人のメイドである。私に拍手をしていただき、あり

がとうございます』

前で手を組み、お辞儀をする。もちろん笑顔を忘れないで。すると会場中からカメラのシャッター音が聞こえた。最前列にいる八人を筆頭に無数のレンズが俺をとらえている。

『こ、これはアイドル並、いや、アイドル以上の熱気を感じます!』

放送部長が健気に実況しているが状況はそれほど簡単ではない。姉さん達はデジカメを構えて写真をとるし、学園の写真部は部員全員がステージの周りを囲っている。

『まだ、熱気が絶えませんが、これから二人のどちらが良かったが投票していただきます!』

放送部長がマイクを使い、会場の生徒をおさめるが、大半の生徒はまだ騒がしいままだ。早く終わって欲しかったので声の音色を変え、マイクに向かって話した。

「みなさん。静かにして投票してください」

話した瞬間に会場は水をかけたように静かになった。なぜか一部女子、男子生徒が顔を赤らめた状態で。

その後の投票は滞りなく進んだ。あと、投票が終わった生徒が女子、男子生徒関係なく握手を求めてきた。なぜだ?

>投票終了後<

『では、結果発表です!』

会場中が静かになり、ゴクリと、のどがなる。

『優勝は……二ーA組です!』

『おっしやー!ー!ー!』

会場にいるクラスメイトたちから喜びの声が聞こえる。

「やったね、ラーちゃん!」

「やりましたね、ラー君!」

近くにいたルナとリアスが俺に声をかける。

さっきまで、ありえないぐらいの殺気を出していたのに驚きだ。

ちなみにレイナとラフィナはクラスメイトたちと騒いでいる。レ

イナが騒ぎ、ラフィナがそれを見て笑っているだけだが。

凜は子供のようにはしゃぎ、いつもはそれを止めている百合も今回は一緒に騒いでいる。

勝って良かった。みんなが喜んでいるから女装したかいがあったものだ。二度としたくはないがな、男として。

あと、こそこそ逃げようとしている二人に……

「なんで逃げようとしているのかな、姉さん」

「に、逃げようなんて人聞きが悪いなラル君」

汗をかきながら手を後ろにやるマナ姉さん。

「じゃあ、その手に持つてるデジカメ。貸してくれる？ 画像消すから」

「や、やだなー。ラル君たら写真撮ってないから画像なんてあるはず無いじゃない」

「マナ姉さん。俺が気づかなかったとでも思ってる？」

「……わ、わかったわよ！ ほらっ！」

デジカメを投げ渡す。結構速く投げられたが落とさずキャッチした。

「フィリア姉さんも渡して？」

「……………」

無言でデジカメを渡してくるフィリア姉さん。
策士である姉さんが素直に渡してきたので、少し驚いてしまった。
……裏がなければいいが。

>自宅<

『かんぱーい!!』

グラス同士が合わさり心地よい音色がリビングに響く。優勝が決まったので、いつものメンバーで集まり食事会をしている。前回とは違い、お酒は厳重に保管している。または、あんな事があつたら、まずいからな。

「ふっー、疲れた。女装なんてもうしたくないな」

「ラーちゃん、あんなにカワイイの勿体ですわ」

「リアスさんの言うとおりですわ」

「リアス、ラフィナ。男にカワイイはないよ……」

ため息をつくが、リアスとラフィナは目を輝かせながら迫ってくる。この二人はカワイイのに目がないからな。

「でも、二人が言ったとおりよ、ラル。男の子なのに、なんでそんなにカワイイのよ？ ホントに嫌になるわ」

「カワイイかったな」

百合と凜が笑いながら二人に続く。百合はため息をつきながら、なんで？といった具合だが、凜は純粋にそう思っているようだ。

「だから、カワイイはないって……」

「まあ、そういうなって、ラル。カワイイかったのは事実なんだし。写真部なんてフィルムなくなったとか言ってたぜ？」

「レイナ：その話は本当か？」

「ああ、ラフィナも聞いてたから間違いない。な、ラフィナ？」

「リアスちゃんの言うとおりですわ、ラルさん。写真部の方が困ってましたもの」

写真部からフィルムを没収しないとな。あんなのが、あの親バカに渡ってしまったら、どんな難題をいわれるか……わかったもんじやない。

「そうか。今日は少し疲れたし、早めに寝るかな？」

ふあゝ」

あくびをして、目をこする。写真のことはあとにして部屋にいて

寝よう。

いつもだったら、まだ眠くならないのだが今日はすごく眠い。疲れたのかな？

「疲れているなら早く休むことをオススメするわ、ラル君」

「ふぁー。だけど俺は護衛だし、みんなより早く寝るわけにはいかないよ。それに……フィリア姉さんなんか隠してるし？」

「そんなことはないわよ、ラル君？　今だって姫さま達がいないならラル君に甘えたいからね？」

「みんながいる前ではやめて、お願いだから……」

俺は姉さんに手を合わせてお願いする。

人間界では二人になることはないから、まだないけど異世界では二人になると、すごく甘えてくるんだよな。

おれ以外にも、そういう表情を見せれば姉さんだって彼氏ぐらいできるだろうに。なぜ？

「はぁ、ちょっと仮眠してくるから適当にしてて？」

少し笑いながら皆をみる。それぞれが俺が作った料理を食べ、ジュースを飲んでいる。

それが当たり前のようになっていると自然に笑顔になれる。

俺はいま日常にいる。あの時とは違う、日常にいる。

俺はこの、みんなが笑顔になれる日常を送るために：騎士となったんだ。

みんなの笑顔を見て、ふと、昔のことを思い出してしまった。

頭の中に流れる過去むかしの記憶。悲しいことや辛いことばかりだった。

だから、いまの日常がすごく心地よい……

「ふあゝ、姉さん少しだけ寝てくるから」

「わかったわラル君」

姉さんにひとこと声をかけ扉を開けて部屋をでようとしてが後ろに振り向き、日常みんなを見る。

俺は自然と笑顔になっていた。

理由はわからないけど、俺は笑っていた。

＞三十分後＜

「ふあゝ、よく寝た。これで大丈夫だな」

ベッドから出て、部屋を出る。階段を降りて皆がいるリビングへ向

かう。

リビングが少し騒がしい？話をしているだけなら、こんなに騒がしくならないよな？……まさか何かあったのか！

ガチャ！ 少し乱暴にドアを開ける。

「姉さん！ 何かあつ……た？」

ドアを開けると、そこには今日の男女逆転の写真があった。女装姿のおれの写真ばかりがパツと見て約百枚ほど。

「これは何かな、みんな？」

あわてて写真を隠す八人に軽く怒気を出しながら、近づく。

「こ、これは俺たちが撮った、しゃ、写真で……」

「そんなことを訊いているわけじゃないんだ。レイナ」

目を泳がせながら言い訳をするレイナ。いつもだったらルナがやる役目をレイナがやった。これは他のみんなより野性的な感覚が高い、レイナが本能から危険だと感じたためであろう。

「まさか、カメラが二台あったとは……フィリア姉さん。やっぱり策士だね。マナ姉さんとは違う」

「ラ、ラル君それって私がバカってこと！」

マナ姉さんが高い声を出しつつ、バカにしたことに怒って訊いてくる。

「別にマナ姉さんをバカって言うてるわけじゃないよ？　ただフィリア姉さんは人の裏をかくのが上手だな、って言うてるだけ」

「そ、そう。なら別にいいわ。……ちょっと、待ってそれって私よりフィリアの方が頭が良いってこと？」

マナ姉さんが首をかしげながら悩んでいる。仕事の時はしっかりしてるのに、日常では、どこかぬけてるな。一般的に天然と言うだろうか？

「それより、フィリア姉さん。俺の写真のデータ、今度こそ全部返してくれない？」

「いやよ」

予想通りの答えが姉さんの口から聞こえる。姉さんのことだから、まだ策があるだろうが、それをここで止めるのには大きな意味がある。

「どうしても？」

「どうしても」

コクリ、と頷く姉さん。

真剣な表情なんだけど、その手に持ってる写真（俺の女装姿）では、何となく締まらない。

「頭なでなで」

「俺にやれと？」

つぶやく姉さんにすぐに反応する。

「やったら、データ返してくれる？」

「とりあえず、交渉には応じるわ。今ここで、なでてくれたら」

つやのある、黒い長髪を俺の目の前に突き出してくる。
ごくり。

のどが鳴る。俺ではない。もちろん目の前にいる、フィリア姉さんでもない。

姉さんの後ろを見る。

固唾をのんで、俺たちを見る七人。全員が凝視である。

「くっ！　どうにでもなれ」

無意識でやっている、いつもだったら何にも感じないのだが、こうも見られると照れるものがある。

なでなで、なでなで

姉さんの頭をなでると視線が強くなった。私もやって欲しいな。いいな、といった具合だ。

なでなで。

「ふぁ」

目を細めて気持ちよさそう声を出す姉さん。

みんなに見られるのは、ちょっと照れるが言ってくれればやってあげるのに、なぜ？

「もういい、姉さん？」

「いいわよ。…あんまり、なでられてクセになるのもアレだし」

「ん？　なんか言った？」

「な、なんでもないわ！」

顔を真っ赤にして首を振る姉さん。　ぼそぼそつぶやいてなに言ってたか分からないけど、今はそれよりも

「姉さん、それでデータは？」

「せっかちなね、ラル君。私は交渉に応じると言っただけよ」

こういう切り返しは予想通り。だから

「なにをして欲しい？」

「そうね……！　ちょっと目をつぶてくれない。あとは自分ですか

ら」

なにを思いついた顔をするフィリア姉さん。なぜか、これから大変なことが起こる気がする。

「目を？ それだけ？」

「それだけ」

微笑を浮かべる姉さんに少しだけ恐怖を感じる。

幼少時代にあった得体の知らない恐怖に似た恐怖を。
いやな予感がするが言われた通りに目をつぶる。

「絶対に開けたらダメよ」

コクリ、と念を押す姉さんに頷いた。

肩に手を置かれ、顔に逆の手が触れる。そして、

チュ。

頬っぺたに何かが触れた。目を開けると顔を真っ赤に染めたフィリア姉さんがいた。状況的に考えると、頬っぺたに。

「ね、姉さん……」

なにを、と言う瞬間に絶叫が聞こえた。

『ずるい（です）ー！ー！』

絶叫を出す。みんなに驚き思わず足を後ろにやる。

「な、何がずるいの？」

鬼気迫る七人のオーラに押され、出た声はすごく枯れていた。

「フィリアだけずるいのよ！ 私なんかバカにされたのに何もなしのよ！」

「それって、ただの八つ当たりじゃ……」

「うるさい！ ラル君はみんなに平等じゃないのいけないの！ わかった！」

「は、はい！」

思わず返事をしてしまったが、これでは俺はみんなからキスをされてしまうのか？ タダでさえフィリア姉さんのでドキドキしているのに？

「さっーて、準備はいいかしらラル君？」

「う、うああああ！！」

普段だったら綺麗やカワイイと思う彼女達の笑顔がこの時ばかりは、恐ろしく思った。

迫る彼女達を見ながら、理性が一線を越えないようにするのが精一杯だった。

翌日には満足した顔をする六人の美少女と二人の美人。
それとは対照的に疲れた表情をする一人の少年。

なんとか、踏み止まったけど、四人が泊まるなんて……。
かなり理性がヤバかったぞ。だけど皆が幸せなら良いか。みんな
の笑顔が見れたら、それは日常（幸せ）なのだから。

いつもより、少しうるさくなった通学路を歩きながら、ふっと顔に
笑みが浮かぶ。

ラルの日常・前編（前書き）

新年明けましておめでとうございます！ m（ m

これを投稿している時は、一月一日でしょう。

さて、今回も更新が遅れてしまいました。2011年も姫の騎士をよろしく願います！ m（ m

ラルの日常・前編

俺の朝は早い。朝五時に起床して武術と魔法の鍛練。六時には、それを切り上げて六人分の朝食を三十分ほどで作り、それが終わればまず姉さん達を起こす。

部屋に入りベッドに近づく。　こう、無防備な寝顔を見ると、こうなんか照れてしまう。

「姉さん。起きて朝だよ」

ゆさつゆさつ。

「んゝ。眠い……」

部屋に入り、ベッドから金髪をのぞかせている、マナ姉さんを起こす。

比較的寝起きが良いマナ姉さんは掛け布団を奪い取れば、あとは勝手にキッチンに行くので良いが隣の部屋にいるフィリア姉さんはそうはいかない。

普段しつかりしている分寝起きあまり良くはない。いや、寝起きが悪くはないのだが行動がよくわからなくなる。　部屋に入り、ベッドを見ると……

「ぶっ！　なにやってんの姉さん！」

姉さんは今の声で起きたようだが、その姿がまずかった。

なぜか上のパジャマのボタンが全開だった。平均的な大きさの胸

だが白い肌がよく見える。

「うあゝ。もう朝？ 早いわね」

寝ぼけているのか、わざとやっているか分からないが俺がいるのにパジャマを脱ぎ、壁にかかっている普段着に着替えようとする。

「ね、姉さん！ 寝ぼけてないで、ちゃんと起きて！」

バタンッ！

パジャマを脱ぎ始めた時にすぐに部屋から出たため、何とか姉さんの柔肌を見なくてすんだ。

毎朝、毎朝これじゃ理性が持たないぞ……。

次にリアスの部屋に行き、扉をノックする。

「はい。どうぞ」

がちや。

「リアス。朝だぞ」

扉を開け部屋に入ると制服に身を包んだリアスがベッドに座っていた。

だが、たまに早く呼びにくると着替える途中だった場合があるから、油断ならない。それで朝から可愛らしい悲鳴を聞いて耳が痛くなったからな。

「お、起きてたか。やっぱり、リアスは優秀だな」

なでなで。

「ふぁ……」

リアスに近づき頭を撫でる。これは四人の中でリアスにしかやっていない。

マナ姉さんは俺が行くまで絶対に起きないし、フィリア姉さんは寝ぼけている。ルナは……まあ、後で分かるからいいだろう。

簡単に言う朝限定のご褒美みたいなものだ。ちなみに今のところリアスしか撫でたことしかない。

泊まりに来た昔なじみである四人の時はみんなを起こすひまがなかったから、やってはいない。

「よし、後はルナだけか……今日は何をしてくるか」

リアスの頭を撫で、ルナの部屋に行く。

がちや。

ゆっくり部屋の扉を開ける。マナ姉さん同様にベットから赤髪が見える。だが、ルナはいつも驚くことをやってくる。

気配を消して、寝ているルナに近づく。そして掛け布団に手をかけようとした瞬間にベットから手が出てきて俺の手を掴む。ずるっ！

そして、そのまま中に引きずりこまれる！？

「ラーちゃん。えへへ……」

ベットの中には、すごく幸せそうな表情をしている、ルナがいた。

そのまま俺に唇を近づけてきた!?

「ちょっと、待てええええ!!」
寝ぼけるなルナー!」

キスをしてくるルナを必死に拒む!

「んー、ラーちゃん。好き! チュー」

「だから! 起きろ!」

寝ぼけているルナと格闘すること五分。ルナを無理矢理起こしキツチンに二人で向かう。

その後は五人で朝食を食べ、それが終わると朝のうちに仕込んでいた、学園で食べる昼食を作り、俺とルナ、リアスは学園に行き、マナ姉さんとフィリア姉さんは異世界から毎日送られてくる仕事（書類）をする。

こんな朝を送りながら毎日が過ぎていく。

ラルの日常・後編（前書き）

やっと更新が出来ました！いつも以上に遅れて、すみませんでした
! m (m

ラルの日常・後編

「ラルちゃん、おはよー！」

教室の扉を開くと凜が飛び付いてきたが、毎度のことなので魔法を使い、凜の動きを遅くする。

ゆっくりと空中にいる凜の横を通り席に座る。

びたーんっ！

廊下の方から心地よい音が聞こえるが、いつもいつも飛び付いてくるので、もう気にしない。

後ろから、鼻が痛いと言声で聞こえるが気にしない。

「オッス、ラル。毎朝毎朝大変だな！」

「そう思うなら止めてくれよ。懐いてくれているのは良いが教室に入るたびにこれじゃ疲れる」

「それは例えレイナちゃんとはいえ、無理だと思いますわ。ラルさん」

「そうかも知れないが、ラフィナ。俺のことを労ってくれないのか？」
「席に座るとレイナとラフィナが近づいてきた。」

いつも通りの朝の風景だ……んっ？

「百合がないようだが、どうした？」

「百合だったら……どこに居るんだっけラフィナ？」

「えーと、百合さんでしたから日直なので教務室のほうに行ってる
と思いますわ」

あごに指をあて、首をかしげる。ふわふわとした、お嬢様な雰囲気
を出しているラフィナがやると、なんか落ち着くな。

ほら、クラスみんながのほほんとした感じになってる。

『なんかほのぼのするね』

『本当にね』

『くそっ！ ラフィナさんがあんな雰囲気じゃ手が出せね！』

男子生徒が殺伐とした雰囲気だが女子生徒はラフィナの雰囲気に飲
まれている。うん、ほのぼのとしてる……？

「ラルちゃん、はなが痛い。どうにかして」

いつまにか凜が鼻を押さえて近づいてきた。若干、涙目になって
いるのに、こう守ってやりたくなる気持ちになるのは俺だけじゃな
いだろう。

ん？　なんだ少し背筋に寒気が、そう思い寒気がした方を見ると
……。

黒いオーラを発している百合がいた。

「凜、あんたは毎朝！　騒がしいのよ！」

百合が凜に注意する。これも毎朝のことだ。低血圧の百合には凜
の声と行動は朝にはきついらしい。

「だいたい凜、もう少し考えて行動しない！」

「うーっ……」

凜が百合の前で正座をしながらだが、小さくなって見えるのは気のせいではないだろう。

「こうしてみると母親が子供を叱っているようにみえますわね」

「ぶっ！ リアス。なかなか言うじゃないか！ 母親と子供か。はっはっは！ うけるー！」

「レイナちゃん、笑いすぎですわ」

リアスの何気ない一言に、レイナが爆笑し、ラフィナがたしなめる。

「だ・れ・がっ！ 母親だっ！」

百合が凜の説教を止めて近づいてくるが、時間切れだ。がらがらっ。

「席座れ。朝のSHR、始めるぞ」

教室に一ノ瀬女史が入ってきた。まあ、こんな感じで朝は過ぎる。にがやかのは良いが、たまには静かにして欲しい気持ちもあるけどね……。

＞昼休み・屋上＜

『ジャンケンポン!』

俺の目の前では、今となっては恒例になった。ジャンケンをやっている。

なんのジャンケンかというと……。

「きょうは、私ですわ。はい、ラルさん。あーん」

ラフィナがおかずを箸で俺の口に運ぶ。そう、このジャンケンはこのために行われていたのだ。

ちなみに、ルナとリアスは参加していない。俺と一緒に住んでいるからという理由だからだそうだ。

「ラルさん？」

首を傾げるラフィナ。どうやら少し、ぼーっとしていたようだ。

「済まない、ラフィナ」

周りから視線を感じながらも、ラフィナからおかずを食べる。

もぐもぐ。

「どうです。おいしいですか？」

頬を赤く染めながら、上目づかいで見てくるラフィナ。

「ああ。美味しいよ。ラフィナみたいな、かわいい女子に食べさせてもらったら、なおさらね」

「……？（ラルさんたら。毎日のように甘い言葉を言ってますが、自覚はあるんでしょうか？）」

頬を赤くしながら、首を傾げるラフィナ。器用だな。その後、ラフィナに食べさせてもらって昼食が終わる。いつものように、みんなと雑談をして、昼休みが終わり。午後の授業が始まる。

>ニ―A<

「異世界間の移動には、門施設ゲートを使用しなければいけない。これはみんな知っているな？」

午後の初めの授業は異世界史。二世界間の繋がったことにより二世界間の必須科目になった。

「また、門施設ゲートを使用し、二世界間を移動するには、大量の魔力を消費するが、魔法と科学の発展により近年比較的、魔力を消費せずに、二世界間を移動出来るようになった」

いま、授業をやっているのは異世界史担当の男性教師だ。（妻子あり）

「また、高位に位置する神族、魔族は自分自身の魔力を使い、二世界を移動することが出来る。これを最初に出来た人物を……グローバル。答えみろ」

「はい。一般的には初代・神帝、魔帝とされていますが近年の研究によつて二世界間を最初に移動したのは、グローバル家・初代当主クリード・グローバルと言われています」

席を立ち、既に暗記している教科書の説明を言う。すると、先生は感心した表情をする。

「まだ、授業では教えていないとはいえ、しっかり予習しているみたいだな。みんなもグローバルを見習うようにしろ。……少し早いがキリもよいので、ここで終わりにする」

そう言い残すと、先生は教室を出て行った。すると教室は休み時間独特な雰囲気の流れはじめた。

『はあ、疲れた』

ルナ、百合、レイナが、《ぐでーん》と、机に潰れる。勉強が苦手な三人娘には昼休み直後の授業がきついようだ。

「つねに日頃から勉強しないから、こういうことになるのだ」

子供っぽいのが、なぜか勉強はでき、学年順位でも一桁代をキープする凜が、ここぞと、ばかりに百合をおちよくる。

「ほうっ。いまだに、親から起こされないと朝が起きれない子供がそれを言うか。ほれ、ほれ」

「い、いはいよ。ゆありちゃん」

百合に頬つぺたを掴まれて、いいように伸ばされる。涙目の凜。いつも通りに過ぎる日常は放課後まで続き、空が夕焼けに染まる。

>下校時<

空があかね色に染まり、俺達を照らす。今日はみんなに用事もなく、七人揃って帰っている。

「そう言えば、もうそろそろテストだな」

それまで賑やかに談笑していた六人だが、その内の三人が『ギクリ』っと、動きを止める。

「俺やリアス、凜、ラフィナは大丈夫だと思うけど、三人は大丈夫？」

勉強な苦手なルナ、百合と毎回、数学と英語が赤点もしくは赤点ギリギリのレイナがさきほどこら若干だが、汗をかいているように見える。

「だ、大丈夫だよ、ラーちゃん！ 仮にも私は異世界、神族のお姫様だよ。いざという時はお父さんに……」

「権力と立場を使うなよ」

「はい……わかりました」 ルナにしっかりと釘を刺し、残り二人に顔を向ける。バツ！ そんな効果音つきそんな勢いで目を逸らす。

「百合。レイナ。テ・ス・トは大丈夫だよね？」

「ほ、ほら。私は授業しっかりと受けてるし、少しぐらい赤点でも……」

「お、俺は数学と英語が赤点でも他の教科は平均点だし、二つぐらいは……」

「大丈夫だよね？」

『すみません。勉強、教えてください』

少し声を強くして訊くと頭を下げて頼んできた。

俺は、はぁー、とため息をはきながら、手で頭を抑えた。

異世界の学園でも勉強会は開いてたけど、人間界では、もっと大変になるな。勉強でも、その後の事でも。

>自宅<

あの後にテスト前に勉強会を開くことが決定し、百合と凜。レイナとラフィナと、それぞれ二人組でちょうど別れ、俺達は三人は、そのあと雑談をしながら帰っていった。

ガチャリつと、玄関の扉を開き中に入ると、

「おかえりなさい。あ・な・た」

純白のエプロンを着けたマナ姉さんがいた。今じゃ、誰もが普通になっているが、姉さんが初めて、これをやった時には、

『ラーちゃん（くん）！ いつの間にマナさんと関係を！』

と言われ肩を掴まれて揺さぶられた。今じゃあ、それはなくなかったけど、帰るたびに二人のお姫様に絶対零度の視線をもらう。

今ももらってるしな。俺が何かしたのか？

「最近、反応がなくなってきたな。また、何か驚くようなことを考えないと」

ぶつぶつ、何か物騒なことを口走るマナ姉さんだか、その背後からフィリア姉さんが近づき、右腕を振り抜き、頭をはたく。

「いったああああーい！？ なに、してんのよフィリア！」

スパーンッ、と妙にいい音を鳴らした頭を抱えながら、フィリア姉さんを睨みつけるマナ姉さん。

「毎日、こんなことをしている。あんたの頭をはたいたら少しはこりるかなって思って」

はあー、と、ため息をはきながらもその表情はどこか、この現状を楽しんでいるように見られる。フィリア姉さん。

フィリア姉さんもマナ姉さんをどうにかしたいみたいだ。

「ちょっと、どういうことよ！ 私が毎日こんなことをしてるみたいじゃない！」

『しないの（ですか）？』

「いや、してるけど……そんなに息を合わせなくても、なんか、こう、もう少しオブラートに包んで、ね？」

俺達四人が同時に言うと、マナ姉さんが引きながらも同意を求めてきた。

マナ姉さんは優秀だけどプライベートだと、凜とは違う子供っぽいところがある。それをからかうのも毎日のことだ。

>自宅・夕食後<

あの後、マナ姉さんを通り、からかい、夕食を食べた。平日の夕食は学園に行っているため俺が準備することができないので、姉さん達を作っている。

ちなみに、朝食と学園に持っていく。お弁当は毎朝俺が作っている。

土曜日や日曜日、祝日で学園が休みの場合は夕食も俺が作る。ルナや姉さん達はそれの手伝い。

リアスは料理が、かなり苦手なので参加させていない。時間を見つけて料理の勉強と特訓をやっているのだが、上達しないのが現状だ。

「さって、洗い物もすんだし、一段落するか」

リビングにあるソファーに座り、体を休ませる。

夕食の洗い物が終わったら毎日、これをやる。一種のクセみたいなものだ。

「ラル君。ちょっとマッサージしてくれない？」

三十分ほど休んだらマナ姉さんがマッサージを頼んできた。なぜ姉さんがマッサージを頼むかというと、その……胸が重くて肩が凝るらしい。

基本的に家でデスクワークと家事をしているため、凝らないように思われるがマナ姉さんが言うには、それでも凝るらしい。

「あー、気持ちいい」

肩をマッサージしているとマナ姉さんがリラックスした。気の抜けた声を出した。

＞風呂場＜

あれからマナ姉さんをマッサージし、今から風呂に入る。ちなみに俺がマナ姉さんをマッサージしている最中にルナ、リアス、フィリア姉さんの三人は風呂に入り終えている。

マナ姉さんは仕事の残りを思い出したらしく、今は部屋で書類作成をしている。

「あー、気持ちいい」

湯舟につかりながら、人間界に來た事を思い出していた。まさか、むかし遊んだ女の子、四人がいるなんて思いもしなかったな。

しかも、四人ともあんなに綺麗になってるなんて、

「思いもしなかったな」

「何が、思いもしなかったのラル君？」

「いやね、異世界から人間界の冬月学園に転校した時に、まさか昔に遊んだ女の子四人がいるとは思いませんでしたから」

「まあ、普通は思わないわよね。背中ながしてあげるから、湯舟から出てくれる」

「わかったよ。フィリア姉さん」

フィリア姉さんに言われた通りに湯舟から出て、背中を向ける。
……ん？ フィリア姉さん？

ゆっくりと背後にいる、フィリア姉さんを見る。

「どうしたのラル君？ そんな驚いた顔をして、それにそんなに見つめられると、い、いや、ラル君は嫌いじゃないよ。むしろ……す、好きだけど……」

フィリア姉さんが顔を赤く染めながら、俺を見て、なにか言っているが問題はそこではない。

バスタオルで身を包んだフィリア姉さんがいた。

これは風呂場にいるからしょうがない。いや問題はあるんだが、

「俺が入っているのに、なんで風呂場にいる……！！！！」

「え、背中ながしてあげようと……」

首を傾げて、何をいつてるのみたいな顔をする、姉さん。あなたに恥じらいはないのか！！！！

「いいから、出てってくれ！」

フィリア姉さんの身体を見ないようにして、背中を押して風呂場から出す。

「えゝ？」

「えゝ、じゃない！」

姉さんを無理矢理、風呂場から出し、魔法を使い、言っているであらう。非難の声を聞こえないようにし、鍵を閉める。

「ふつゝ。風呂場ぐらい静かにしてほしいものだ」

＞夜十時・リビング＜

あのあとはフィリア姉さんが風呂場に入ってくることもなく、一人の時間を満喫した。

「さって、寝るか」

リビングにある時計の針が十時を指している。夜は十時に寝る。これは、この家の決まりごとだ。まあ、実際は三十分だが、

「おやすみゝ」

「おやすみなさい」

「お先に失礼します」

「じゃあね、ラル君」

女性陣四人がリビングから出て、自分の部屋に向かった。ちなみに順にルナ、リアス、フィリア姉さん、マナ姉さんだ。

「おやすみ、みんな」

四人が出ていった。あとは家の戸締まりと結界を張り直すしてから自分の部屋に行く。

部屋に入ると初めにするのは写真立ての中にいる三人に今日の出来事を話すことだ。日課だ。

「父さん、母さん、じいちゃん。今日も楽しかったよ。……でも、こんなに楽しいとなんか、怖いね」

平和だと後が怖い。その日常が壊れてしまったら、もう直らないような気がして、

「おっと、いけない。また、マイナス思考になってる。……俺の悪いクセだな」

自分自身の短所が嫌になりながらもベッドの中に入り、まぶたを閉じる。

明日も変わらない日常があると信じて。

ラルの日常・後編（後書き）

感想待ってます！

異世界への一時帰還(前書き)

短いですが、投稿します！更新が遅れてしまって、申し訳ありませんでした。

ダメ作者ですが、よろしくお願いします！ m (m

異世界への一時帰還

毎日、変わらない日常を過ごす娘バカじゃなくて……神帝、魔帝から異世界に一時的に帰還するように連絡がきた。その際、看護師の怒声が聞こえた気がしたが気のせいだと思っていたい。

＞異世界・国立病院＜

いま、俺は異世界にある国立病院の最上階にいる。この最上階は、基本的に、かなり偉い人物や金持ちしか入れない。

異世界のトップたる。神帝、魔帝もこの最上階にいる。……なぜ、人格を配慮されない！娘バカの二人に数少ない病室をやるくらいなら、難病の子供にやったほうが何十倍も良いに決まってる！ふと、そんなことを思いながら、カラカラっと病室の扉を開ける。

「ほら、ゲイル！この酒を飲め！うち神皇宮の料理長が食材から厳選して作らせたから、上手いぞ」

「それなら、魔皇宮うちのシェフ長が作った。ワインも美味しいよ！」
真昼間から、しかも病室で、お互いのオススメの酒を飲みあっていた。

「何をやってるんだああああ！！」

病院だと分かっているながらも、大声で叫んだ。

「お、ラルも来たか。まあ、落ち着ついて、これでも飲め！」

「おやおや、抜け駆けは、いけないよ。ラルくん、こっちの方が美味しい」

怒られたことを微塵に感じないように笑いながら、酒を勧める。
娘バカこと、神帝、シガルⅡスローフィールドと魔帝、ゲイルⅡウオーカー。

真面目な声で、人のことを呼び出したと思ったら……いつもと変わらないじゃないか！

「用が無いなら帰りますよ！」

声に怒気を含ませて、扉に足を向けるが、

「まあ、待て。仕事があるのは事実だ」

先程とは違い、真面目な声で答える神帝。

「分かりました。神帝様。魔帝様」

自分も顔を目を、異世界のトップ二人に合わせて、膝をつき、真面目に答える。

二人が目線を合わせて、真面目な声を出す時は重要な案件な時だ。

「今回の任務は……ある生き物の保護。異世界動物保護法にあたる絶滅危惧種の銀猫シルバー・キャットの保護だよ。場所は神魔の森の最奥部」

「銀猫！？」シルバー・キャット その話は本当ですか！」

無礼だと知りながらも、魔帝に訊き返す。

「ああ、本当だ。うちの調査班の一人が偶然だが見つけた」

「それが本当なら……すごいことですよ」

魔帝から神帝が引き継ぎ言葉を繋げるが、そんなことはどうでもいい。
シルバー・キャット

銀猫。文献でしか知らないが、知能は人と変わらず、その姿は完璧な人から、半人半獣、猫にもなれ。

全体的に整った顔をしており、魔力も高い。そのため過去にペットとして、乱獲され、その個体数を減らしていき、今では絶滅したとまで言われていた。

「では、頼むよ。ラルくん」

「了解いたしました」

膝をつき、神帝、魔帝から任務を受け、転移魔法を使い、神魔の森最奥部に向かう。

異世界への一時帰還（後書き）

感想を書いていただくと、作者の執筆スピードが上がります。

銀猫（シルバー・キャット）（前書き）

どうも、ダメ作者こと世界です！ 珍しく、比較的、速く書き上げたので、更新します。（短いですが……）

これからも姫の騎士をよろしくお願いします！

m
（ m

銀猫（シルバー・キャット）

大木が連なる森を、魔法により強化した身体で突き進む。かれこれ一時間以上走り続けているが、シルバー・キャット銀猫が見つかる様子はない。

警戒心が強いと言われているシルバー・キャット銀猫がいないのは、わかるが、他の神獣、魔獣たちをあまり見かけないのも、変だ。

「いったい、何が……」

神魔の森は、それこそ、皇宮に仕える騎士と同等か、それ以上の力を持っている神獣、魔獣がいるし、神族、魔族以外の一般的に亜人と呼ばれる者たちもいたはず、だが、それをあまり見かけない。

「……なにか、あったのか？」

不自然と思いつながら、森の最奥部に向かう。

＞神魔の森・最奥部＜

「着いた。だけど……」

俺の目の前にいたのは、

『ニャー』

シルバー・キャット
銀猫の子供。しかも、珍しい双子だった。

「……か、かわいい……」

たぶん、俺の顔は誰が見ても分かるくらい赤くなってるだろう。
自分自身で言うのも、なんだが、俺は、かわいい物と猫は他人が
引くぐらい、大好きだ！

「か、かわいい。家に持って帰りたい！」

たぶん、俺の顔は恋する乙女みたいな感じだろう。

そのことを知らずに無邪気に鳴く、双子の銀猫。シルバー・キャット

シルバー・キャット
もう無理……限界っ！俺は人目がないことをいいことに、双子
の銀猫に突っ込んだ。

「かわいいっ！ とてつもなくかわいいっ！」

シルバー・キャット
双子の銀猫を捕まえてモフモフとする。銀猫達は、それを嫌がる
様子もなく、俺の顔を舐める。

『……くすぐったいよ、お兄ちゃん』

シルバー・キャット

銀猫が不意に目を細め、甘える声を出し、より甘えきた。……お兄ちゃん？

どうということだ？

「まあ、かわいいから、良いか！」

珍しく短絡的だと自分自身で気づきながら、俺は甘えてくる二匹を可愛がった。

＞三十分後＜

「あー、癒された」

あの後、獣化から半獣半人化した二匹を可愛がり、癒された。ちなみに女の子で、名前はミナとレナ。お姉さんがミナで妹さんがレナ。

目が赤い方がミナで青い方がレナだ。

思えば人間界に行ってからのは気の休む日はなかった。毎日、護衛と学業の日々、きつくはなかったが、心の癒しが欲しかったから、よかった。

「で、君達はなんで、二匹だけなの？ お母さんやお父さんは？」

腕の中にいる二匹に、優しく語りかける。

『パパはいないよ、ママは……三日間帰ってこないの』

なるほど、いきなり甘えてきたのは、母猫が帰って来なかったから……。

成体になった銀猫シルバー・キャットが帰ってこない？ 何かあったのか、もしくは調査斑が見つけたのが、その母猫だったのか？ 疑問を抱えながらも、これからのことを考える。そして、

「ねえ、君達？」

『なーに、お兄ちゃん？』

「君達には、お父さんがいないんだよね」

『……うん、お兄ちゃんがパパだったら、いいな』

悲しそうな声を出す、双子の銀猫シルバー・キャットにある提案を出す。

「だったら、お兄ちゃんが君達のパパになってあげようか？」

『……えっ？ いいの、お兄ちゃん？』

腕の中にいた、二匹は花が咲いたような笑顔を見せくれた。

「いいよ。それにママのことも探してあげるよ」

人間だろうが、神族、魔族だろうが、亜人だろうが、こんな小さな子供をほって置くわけには、いかない。

『う、うああああああん!!』

二匹は安心したのか、それとも新しい家族が出来て嬉しいのか、わからないが大声は出して、泣いた。

あ、みんなに、どうやって説明しよう？

泣いている二匹を腕で抱きながら、今後の事を考えてしまった。

銀猫（シルバー・キャット）（後書き）

感想待ってます！

書いていただくと、作者が泣いて喜び、執筆スピードが若干上がります。

事後報告（前書き）

更新遅れてしまい、すみませんでした！ m (m

次は早く書き上げたいと思います！

これからも姫の騎士をよろしく願います！ m (m

事後報告

「――と言うわけなので、この銀猫は私が引き取りたいのですが？」
シルバー・キャット

ミナとレナを連れだって、病院にいる神帝、魔帝の前に膝をつき、報告と引き取りたい理由を告げる。

黙りこむ二人の権力者。黙っていた時間は短かったが、その沈黙を我慢できなかったミナとレナが俺の服をギュッと、引っ張る。

「俺個人で考えるには良いんだが、立場込みだと話は違う」

「私達はそれぞれ魔族と神族のトップなんだ。だから、いくら自分の娘の騎士とはいえ、法を曲げることはできない」

神帝、魔帝とつづくが、その回答は予想していた。
こちらの手札は二枚。

「ですが、銀猫シルバー・キャットの血液サンプルさえあれば、研究できるのでは？」

「それはそうだが、言葉は悪いが実際、目の前に絶滅危惧種がいるんだ。生きたまま研究したいのが神帝、魔帝の見解だ」

神帝が代表して述べる。言いたいことは理解できるが……納得は

できない。

なので、もう一枚の手札を切る。

「そうですか。――では、こちらをどうぞ」

神帝、魔帝に携帯電話を渡す。話す前に、話をつけていたので、うまくできるだろう。

怪訝な顔をしながら、携帯電話を取り、耳にあてる。

『――！！！！！！？？』

表現できない声が聞こえた。……ルナとリアスに頼んで、お父さん（パパ）なんか大嫌い！　と言ってとは、頼んだが、効果は絶大だな。

「この子達を私に任せていただければ、ルナ様、リアス様には私から今の発言を撤回するよう、言っておきますが？」

ミナとレナの手を握りながら、聞くと、もげるんじゃないかと錯覚するぐらいのスピードで首を縦にふる。神帝、魔帝の二人……もとい、娘バカ二人。

「ありがとうございます。早速ですが、もう任務が終わりましたの

で、このまま人間界に帰り、両王女の護衛任務に戻ります」

ミナとレナの手を引きながら病室を出ていく。

「あ、あと。この子達の血液サンプルを王立研究所のほうに送っておきますから、ご心配なく」

>人間界・自宅<

ミナとレナの手を引きながら、玄関前に立つ。僅か一日しか異世界に行っていないのに、懐かしい感じがする。

行く時とは違いミナとレナがいるせいだろうか？

「これからここがミナとレナの家になるよ——」

二人と同じ目線になるようにしゃがみ、笑いかける。

いきなり、異世界から人間界に来て、少なからず、不安や緊張があるはず。少しでも、それを取り除くことが出来ればいいけど。

二人の手を引き、玄関の扉を開く。

『お、おじゃまします……』

びくびくとしながら、家に入る、ミナとレナ。

「おじゃまします、じゃないよ。ただいまだよ」

『！ う、うん。た、ただいま！』

はにかむ笑顔を浮かべて、三人で一緒に一步を踏み込む。

「――で、どういふことかな、ラーちゃん」

ルナが、笑顔でそれでいかにも、怒っていますといった雰囲気醸し出し、四人を代表して訊いてきた。

今、俺から見て右からマナ姉さん、ルナ、リアス、フィリア姉さんの順番で正座をしながら、冷めたような、またか、みたいな目で見下ろされている。 姫であるルナとリアスを中心に置き、マナ姉さんとフィリア姉さんが、それに仕えているような布陣だった。結

構、さまになっており、違和感は感じられない。

ちなみに一緒に家に帰ってきた二人はそれぞれ、お姉さんであるミナは、正座をしている俺のひざの上に座り、匂いを嗅ぐように顔を胸にこすりつける。

レナは四人の視線が怖いのか、俺の服の裾をギュツと握りながら背中に隠れるようにしている。

「どういことかな、と、言うത്？」

「私たちは何・故。絶滅危惧種の銀猫がラーくんになんかに懐いているかと聞きたいの！」

「絶滅危惧種がいることじゃなくて、懐いていることに！」

ルナと言葉を続けるように言ったりアスに思わず、反論してしまった。

「先ほどの電話で、ある程度予想がつかまりましたので」

仕事モードになったフィリア姉さんが見透かしたような口調で語る。

「――それより問題は」

マナ姉さんが締めの一言を告げ、そして、

『なんで懷いているの！（ですか！）』

近所迷惑じゃないかなと思うほど大きな声でせまってきた。

「なんで、と言われましても……」

怯えているミナとレナの頭を撫でながら、四人に告げる。その時の四人の目が羨ましいような、怒っている目が印象的だった。

『——パパ……』

『……！！！！』

涙目になっている二人はすがるような声でつぶやき、その声で目をまるくする四人。

『ラーちゃん！（くん）』

『ラルくん！』

「な、なに？」

ピッタリと声を合わせた四人に驚きながらも、返事をするが、

『説明して！（ください）』

『説明しなさい！』

待っていたのは、ルナとリアスのお願いとマナ姉さん、フィリア姉さんの強制的なお願いだった。

「は、はいいいいッ！」

人間界来てからは、こんなのばかりだ……。

四人に事情を説明して、説得するのに、正座をしながら、一時間を費やしたことは、人間界に来て、一番きつかった。

あ、足が……し、しびれて。——色々とヤバイ。

余談だが、四人揃ってミナとレナにママと呼ばせようとしたが、結局、お姉ちゃんと呼ぶことで落ち着いた。

でも、なんで、ママって、呼ばせようとしたんだ？ 謎だ。

事後報告（後書き）

そろそろ、ヒロイン別の話を書きたいと思います。
もう一話、二話を挟めた後ぐらいに。

秘書達の日常（前書き）

相変わらず遅い更新で鬱になっているダメ作者こと世界です！
こんなダメ作者が書く作品ですが楽しんでる人がいると思って
頑張ります！

秘書達の日常

ラルとルナ、リアスの姫様を学園に送り出したら、神帝、魔帝の秘書である。マナⅡフランベルク。

フィリアⅡハーヴェイ。

この二人の仕事が始まる。

午前中は異世界から送られた書類を処理する。前までは自分自身の仕事場で処理していたのだが、今はラルのというか、グローバル家の養子となり、名実ともにラルの娘になった。

シルバー・キャット
銀猫のミナとレナのことを

見ておかないといけないので、リビングのテーブルを使い、書類の処理をしている。

「本当に手がかからない子達ね。私も早く子共ほしい」

「あの子達見て、和んでないで早く仕事したら、マナ？ 手がかからないのは分かってるから」

今の話を聞いてわかるようにミナとレナは本当に手がかからない子達なのだ。

まだ、小さいので洗濯や料理などの家事はできないが食べた料理のお皿やコップはちゃんと持ってくるし、自ら率先してお手伝いをして、基本的に人に面倒をかけないのだ。

今だって、仕事を処理している二人に迷惑をかけないように仲良くリビングのソファに座り、子供向けの番組を見ている。

そのような番組を見るあたりは、人間界や異世界の子供とそう変

わらない。

「ねえ、レナ」

「なに、ミナ？」

「このテレビに写っている体操のお兄さんとパパだったら――」

「パパの方が数百倍カッコイイっ!」

「そうだね」

まだまだ子供の二人は親離れというか、この短期間で懐かれたラルの魅力というか、聞いていて和む話の内容だった。

「さて、書類仕事も終わったし、あの子達と遊びますか」

「い、いつの間に!」

「あんたが二人見て、和んでるときよ」

そうそうに書類仕事を終わらせたフィリアはリビングでちようどテレビを見終えた二人に近寄る。

「ミナちゃん、レナちゃん。お仕事終わったから、お姉ちゃんと遊

びましようか？ 二人はなにがしたい？」

「お散歩っ！」

「お庭でひなたぼっこ」

運動が得意な妹のレナはお散歩。静かに過ごしたいお姉ちゃんのミナはひなたぼっこ。外で遊ぶか家で過ごすか、キレイに分かれてしまった。

「うーん、お散歩もひなたぼっこも良いわねえ」

「お散歩っ！」

「ひなたぼっこ……」

自己主張が強い、妹のレナはフィリアの裾を引っ張る。レナよりも大人しく、お姉さんのミナは早くもあきらめムードを漂わせ、うつむいていた。

「じゃあ、今はまだ暑くないから、お散歩に行って、お昼ご飯を食べたら、ゆっくりとひなたぼっこにしましょう」

きちんと、どちらの意見も取り、なおかつケンカにならないよう

にするフィリア。

半分あきらめていたミナは、うつむいていた顔を上げ、フィリアに向かって笑顔を見せた。

「じゃあ、行きましようか」

二人の手をひいて、散歩に出かけるフィリア。

「お散歩行ってくるから、お留守番よろしくね、マナ」

「んー、分かった」

書類仕事をやっているマナにフィリアが声をかけるが、書類仕事をしているためか、どこか返事が上の空だった。

「さあ、行きましよう」

『いってきまーす！』

玄関から出て、元気よく声を出す、ミナとレナ。それを見て、思わず、笑みを浮かべるフィリア。

ここでラルがいたら、親子のように見えるのだろうが、今はいいので、仲の良い家族、姉妹にしか見えない。

>川沿いの道<

フィリアとミナ、レナは川に当たり、冷たくなった風を受けながら、ゆったりと歩いていった。

いい天気、フィリアがつぶやき、ミナは空を見上げ、手を掲げ、静かにしているのに対してレナはニコニコと笑いながら周りをキョロキョロと見渡している。

「お散歩も悪くないわね」

「うんっ！ そうだね、フィリアお姉ちゃん」

ひなたぼっこをしたと言っていた、ミナだが、お散歩も悪くないようで、いつもより大きな声でフィリアに応えた。

「川原^{かわら}に降りてみよっか？」

『うんっ！』

フィリアは歩いていった川沿いの道、土手^{どて}からミナとレナの手を引
きながら、川原に降りる階段を下る。

「ねー、お姉ちゃん。川のほうに行っちゃ、ダメ」

「うーん、今日はまだ、暑くないし、間違っ^{まちが}って川の中に落ちちゃう
と、いけないからダメかな？ ラル君。——パパと一緒に来た日
にしましょう、ね？」

「うん、分かった！」

たずねてきたレナをたしめながら、時間をかけて川原を歩く三人。
大体、二十分ぐらいたったぐらいに三人は散歩をやめ、家に帰る
ためにもときた道に戻る。

>自宅<

『ただいま』

玄関を開け、家の中に入るが、いるはずのマナから返事がない。

「? どうしたのかな?」

疑問に思いながらもリビングに行くが姿が見えない。アレ? と
フィリアが思っていると、誰かが裾をひっぱる。誰かと言っても、
ミナカレナのどちらかなのだが、裾をひっぱっている方を見るとミ
ナがソファの方を指を指している。

ゆっくりとソファに近づき、覗きこむと、

「……むにゃむにゃ……」

猫のように体を丸めて眠るマナがいた。しかも、ごていねいに口
の端からは一筋のよだれがキラリと輝いている。

「……」

フィリアはその姿に、イラッときたのか、ソファに近づくと、
無言でマナを足蹴にして床に落とす。

「むぎゃー!」

爆睡状態から強制的に起こされたマナは二十代の女性とは思えない声をあげる。無理矢理に起こされたので、しょうがないと言えば、しょうがないのだろうが、それでも、ヒドイものだ。

「誰よ！ 蹴ったヤツは！ せっかくラル君との夢のベッドインまでもう少しだったのにー！」

起きあがり、キョロキョロと周りを見るマナ。よっぽど怒っているのか、その行動はまさに子供そのものだった。

「ほう。いい夢を見たな、マナ」

「フィリア！？ い、いつ帰ってきたの？」

驚きの表情をあらわにし、あからさまに焦っているのが分かる。そんなマナにフィリアは仕事の時のように冷静、あるいは機械的な音色な声で一種の絶望を言い放つ。

「今日のお昼ご飯はマナが担当じゃなかった？ まさかとは思うけど、お昼ご飯、作る前に寝ていたわけじゃないわよね？」

「そ、そんなこと、あ、ああ、あるはずがないわよ」

ジッと探るような目をマナに向けるフィリア。時間して約五秒。

その間も、黙ってなりゆきを見守るミナとレナの銀猫姉妹。

「――すみませんでした」

視線に耐えられなく、年甲斐もなく平謝りするマナ。
右手で顔を覆い、ため息をつくフィリア。
それを首を傾げながらも見ているミナとレナ。

「……役立たず」

「ご、ごめんなさいっ!」

ぼそっと呟いたフィリアの罵倒を受けるしかないマナ。だが、そんなことを言い合える彼女らの仲はとても良いものだろう。

>午後・四時半頃<

その後、お昼ご飯をマナに作らせ、朝に約束していた通りにひな

たぼっこ兼お昼寝で時間をつぶしていると、あと少しで学園に行っていたラル、ルナ、リアスが帰ってくる時間になっていた。

「うーん、今日はいつもと攻めかたを変えて、时期的には早いけど水着を着て、その上にエプロンかな？」

マナがバカなことと言うか積極的アプローチを考えているが、その手はちゃんと動いており、お昼ご飯の時のようにドジを踏まないようにしている。

それはリビングでミナとレナの相手をしていたフィリアの耳に入っており、知らず知らずのうちに、ため息をはく。

「パパ。まだ、かなー？」

「わかんない」

そのリビングのソファで足をぷらぷらとしていたミナが、呟くように傍らにいるレナに訊き、それを年相応な返事でレナがかえす。

ミナとレナがラルに懐いているのは、わかりきっているが、どちらがより懐いているかといえば、お姉ちゃんのミナである。

それこそ、ラルがいる休日はラルにべったりとしており、必要な時以外は絶対に離さないし、ヒドイ時は猫化して、ラルの頭の上から離れないのだ。

フィリアがそんな姉妹の会話を聞いていると、玄関の開く音が聞こえた。

まっ先に飛び出したのは、甘えっ子兼ファザコン（ラルコン？）のミナ。続けて、レナ、マナ、フィリアの順に玄関に行き、既にラルの腕の中にいるミナとレナ。

さきほどバカなことを考え、それを実行に移したマナ。

そのマナに制裁を加えたフィリア。

そんな四人の乙女たちは自分の大切な人に笑顔で、

『おかえり』

その言葉に返すように、両脇のお姫様からの絶対零度の視線を浴びながらも、乙女達の大切な人。

ラルは笑顔で、

『ただいま』

そんな秘書達の日常が続いていく。

秘書達の日常（後書き）

なんか最終回みたいな終わり方……いや、終わらないですよっ！
では、次回の更新でお会いしましょう！
感想待ってます！

昔馴染みたちの休日（前書き）

もっと早く更新したかった……。大学受験の準備が忙しい。

では、本文へ！

昔馴染みたちの休日

ここは駅前にある喫茶店。そのテラス席に四人の美少女たちがいた。

「はぁー……」

「どうしたの、百合ちゃん？　ため息なんてついて、便秘？」

「違うわよっ！」

ため息をつき、腰までかかる茶髪のポニーテールを揺らしながら声をあげる百合。

怒られながらも、肩にかかる黒髪をまとめ、ショートケーキを子供のように食べる凜。

そんな二人の様子、あらあらと言いながら見守る、肩より少し長い金髪の、どこかおっとりとした雰囲気を出しているラフィナ。

「で、なんで。ため息なんかついてた？」

軽食であるスパゲティを食べていた赤髪ツインテールのレイナ。口の周りにミートソースが少しついてるが、それは隣にいたラフィナがハンカチを使い、取っている。

「だって、ラルがマナやリアスの護衛で人間界に来てるのに、私たち学園以外じゃ、滅多に会わないじゃない？　せつかく近くに住んでるのに……」

百合の言葉に確かに、とうなずく三人。お互いに好きな人が同じなので、その気持ちがわかるのだろう。

「と言うわけで、今日はラルがいるつもりで、遊びましょう！」

「いつも通りじゃなか！」

百合にツッコミを入れるレイナ。それを見て、あらあらと言いなから笑うラフィナと、

「すみませーん、おかわりください」

『まだ、食べるか！？』

のんきにケーキのおかわりを注文をする凜。おもわずツッコミを入れてしまった百合とレイナだが、五個目のケーキなので無理はない。

>ショッピング中<

喫茶店でお茶を楽しんだあと、四人はウィンドウショッピングをして、一件のぬいぐるみ店に来ていた。

「百合ちゃん、百合ちゃん！」

「なに、凜？」

「これ、どう？」

「これ……戻してきなさい」

駆け寄ってきた凜が持ってきたのは、一体のぬいぐるみだった。ただし、値札に二万円とかかれているが、

「えー、なんで？　こんなにカワイイのに？」

「カワイイのはわかったから、戻してきなさい」

「ちえ、わかった」

確かに凜が持ってきた猫のぬいぐるみはカワイイかった。

ただし値段が二万円でなかったら、もっとカワイイかったがな、と百合は家計を切り盛りする母親のようなことを考えていた。

「前も言ったが、ありゃ、まるで親子だな」

「ダメですよ、レイナちゃん。百合さん聞かれたら、また怒りますから」

少し離れた場所でのいまの二人の会話を聞いていた、レイナとラフィナは、つぶやくように話をする。

「でも、いつも強気なレイナちゃんがそんなカワイイぬいぐるみを抱きしめると、よりレイナちゃんがかわいくなりますわ」

「な、別に抱きしめなんか……」

ラフィナに指摘されながらも、胸に抱いたアザラシのぬいぐるみをギューウツとして、離さないレイナ。

「あらあら、レイナちゃんたら」

「なんだよ、ラフィナ。その妙に生暖かい視線は——俺になんかついてるか?」

「いえいえ、何もありませんよ……レイナちゃんがカワイイぐらい

ですわ」

「笑顔言うなっ！ 聞ってる、こっちが恥ずかしいわ！」

「二人はなに騒いでるんだろうね、百合ちゃん？」

「さあ？」

さきほどとは違い、今度は凧と百合が騒いでるレイナとラフィナを見て、疑問に思っている。

＞駅前が続く路地く

あのあと、レイナはアザラシのぬいぐるみをラフィナはウサギ、凧と百合は黒猫と白猫のぬいぐるみを買った。

子供心全開である凧は、買ったばかりの黒猫のぬいぐるみを平均的な胸の中で、ギュウツと抱きしめている。時々、笑い声が聞こえるので、いつも以上に幼く見える。

「いい買い物しましたわね」

「凧がいつも以上に子供っぽいけどね」

「でしたら、レイナちゃんはいつ以上にカワイイのでは百合さん？」

ラフィナと百合がまるで、母親のような会話をしている。会話の話題になっている、二人はぬいぐるみに夢中で気づいてはいない。

「この会話やめない？ また、レイナに母親あつかいされる」

「いいですわよ。でも、レイナちゃんのお母さんになったら、毎日が楽しそうですわ！」

「なんで？」

「だって……レイナちゃんはカワイイですから！」

なにやら、ラフィナの周りに自分と同じ名前の華が見えた百合であった。

「おい、早く来いよ！」

「百合ちゃん、ラフィナちゃん。早く！」

百合とラフィナが会話に花を咲かせていると、いつの間にか、先にいていた凜とレイナがいつも行く。駅前の喫茶店のオープン

テラスを陣取っていた。

あわてて駆け寄る二人。四人になり、今日の話で盛り上がっていると、

「ねえ、君たち今ひま？ 俺たちと遊ばない？」

いかにも遊び人といった、チャラチャラした男四人組が話かけてきた。

主に話している中々、顔の整っている一人だけだが、四人は見向きもしない。

ナンパなんで今まであったし、いまはすぐ近くに、ラルーグロバル、という想い人がいるのだから、相手にする必要はない。

「ちょうど、四人ずつだし、話だけでもしない？ 君たちカワイイしさ」

ちなみに学園やこの街に住む人々は彼女たちをナンパなどしない。前にブチキレて、レイナが二人ほど病院行きたからだ。このナンパしている四人は違う街から遊びに来た、命知らずだというわけだ。

「無視しなくてもいいじゃん」

話かけても、反応を返さない四人に男は近くにいたレイナの肩に手を置こうとするが、

「俺の友人なにか用か？」

『ラル（ちゃん）（さん）！』

突然現れたラルによって腕を掴まれ、四人は声をあげる。しかし、おもしろくないのはナンパしてきた男四人である。

ナンパを成功させて、楽しくやろうとした矢先に、知り合いらしい男が乱入してきたのだから、

「なんだ、てめえは？ 邪魔すんじゃないよ！」

「そうも言ってられないだろ。友人が困っているのだから、な！」

腕を掴まれた男がラルに声を荒げるが涼しげに答え、一瞬で腕を締め上げ、地面にたたきつける。

「ぎゃあ！」

『てめえ！』

「動かないほうがいいよ」

たたきつけた男を助けようと残りの三人が殺気立つが、ラルは指先にマツチぐらいの火を締め上げている男に近づける。

「てめえ、バカにしてるのか！ そんな小さな火なんか、怖くないんだよ！」

「あれ、気づかない？」

向き合っている三人の内、一番大きな男が怒りに任せて怒声をあげるが、ラルは心底わからないといった表情で首を傾げる。

「熱を放出しないようにしてるけど、これかなり温度あるんだ、ほら？」

火を立ている指先を締め上げた男の顔のすぐ脇の道路に押し付けると、音もなく道路が溶け、男たちは息を飲むが、

「そのケンカしてる五人。手を挙げなさい！」

遅くなりながらも通報を受けた人間と神族の警察官が二人寄ってきた。

自分を被害者だと思っている男たちが警察官にいまあったことを話す。話を訊いた神族の警察官がラルに近づく。

「君、ちょっと話が聞きたいだが……グ、グローバル卿!？」

「ん？ あなたは確か、前に武術指南のときの」

「あ、あの時はご指導ありがとうございました！　ところでなにがあつたのですか？」

恐縮し、固まっているが神族の警察官がラルに、なにがあつたか、たずねる。

「友人がナンパをされて困っていてね。助けたただけ。少々魔法を使ってしまったが、あくまで動きを止めるだけで傷つけてはいない」

「了解しました！　彼らには嚴重注意をして帰させますがよろしいですか？」

「ああ。だけど君たちもしっかりしてくれよ」

「はい。では失礼します！」

もう一人の警察官のところに戻り、男四人に嚴重注意を始める警察官。

ラルのことを説明したのだろう。男たちは顔を真っ青を通り越し、顔面蒼白になり、注意が終わったら、逃げ出すようにその場を後にした。

「ラルちゃーん！」

「ぐほっ！」

喫茶店のほうを振り向いた瞬間、凜の突撃を腹にくらうラル。あまりにタイムラグがないためモロに受けてしまった。

「ありがとう！ ラルちゃん！」

「わ、わかったから、どいてくれ」

突撃をうけ、仰向けに倒れているラルにちょうど、お腹のあたりに座る凜。

第三者から見れば誤解をされる体勢だ。現に周りにいる奥様方のほうからヒソヒソと話声が聞こえる。

「礼は言っておくわ。ラル、ありがとう」

「サンキュー、ラル！」

「ありがとうございますわ、ラルさん」

百合が凜の首をつかみ、猫のように引っぺがすと、百合、レイナ、ラフィナの順でお礼を言った。

今時の女の子には珍しくきちんとお礼の言えるのだ彼女たちは。

「お礼なんていいさ。困ってる人がいたら助けるのは普通だし、それが知り合いならなおさらだ」

じゃ、気をつけて。最後に四人に言葉をかけて、自宅のあるほうに歩きはじめるラル。

そんな彼の背中をみて、彼女たち四人は同じことと思ってしまった。

やっぱり、ラル（ちゃん、さん）を好きになって良かった（ですわ）。

ちなみに、なぜラルが護衛そちのけで一人でいたかというと単純に街に張っている結界を改めて張り直していたからである。

昔馴染みたちの休日（後書き）

あれ？　ここ、最近の話。主人公のラルの影が薄い？

次やっとなデート編書ける。長かった……。

ヒロインたちが羽を伸ばせるように、影が濃くなるように頑張ります！

ラルと王女たち（前書き）

短く、内容も薄いけど、投稿っ！

ラルと王女たち

バスに揺られること約三十分。ラル、ルナ、リアスの三人は水族館に来ていた。

だいぶ前になるがラルは王女二人と秘書二人、昔馴染み四人にデートの約束をさせられた。

今までは時間が無かったため出来なかったが、ようやく人間界の生活にも慣れ、時間も空くようになったため、晴れてデートすることになったのだ。

（しかし、水族館か。行ったことないけど大丈夫か？）

ラルは悩んでいた。王女二人はそんな場所に行くのはもちろん初めてだし、ラル自身、幼少の頃から勉強と魔法、武術の修行をする毎日を過ごしたために、水族館なんかに行ったことがない。

「楽しみだね。リアちゃん！」

「そうですね。ルナちゃん」

初めてのデートと水族館に、はしゃぐルナとリアス。

王女たる二人は幼い頃から王宮の外にはめったに出れなかったのだ、この人間界留学は大きな転機であり、また己の想い人であるラルをアピールするチャンスのある機会でもあるのだ。

ぜっこの機会である。今回のデートに気合いが入るのはしょう

がないと言える。

「行くよ、二人とも」

「ハイ」

「わかりました」

あらかじめ調べていたように入場料を払い、水族館に入る三人。
——ラルの両腕はすでに右腕はルナ。左腕はリアスがそれぞれの腕を絡めており、周囲の視線を集めたのは、いつも通りと言えよう。

「ここが」

「水族館」

「なんですね」

驚きと感嘆の声をあげる三人。

人間界にきて、ある程度時間が過ぎ、慣れ始めていたとしても。

あまり水族館などの一般人にはありふれた施設だとしても、三人には新鮮であり興味深いものであった。

「よし！ 今日はいっぱい楽しむぞー！ 行くよ、ラーちゃん。
リアちゃん！」

「腕を引っ張るなっ！ おいつ、ルナ！」

「ま、待ってください」

ルナがラルの腕を強引に引っ張ったため、反対側の腕にいたリアスも巻き込みながら進んでいく。

ひっぱたかれた二人は声をあげながらも顔には、笑顔をあふれている。

ルナが先導して初めに着いた場所は、

「ここって……」

「イルカショーの」

「そう。さっき入口でもらったパンフレットにショーの時間が書いてあって、ちょうど時間だったから！」

パンフレットをもらっても読む前に引っ張られたラルとリアス。一番最初にパンフレットをもらったとはいえ、すぐさま決定。実行したルナに二人は思わず、はぁー、とため息をはく。

「相変わらず、そういうのは得意だな。ルナ……」

「えへへ。褒めてもなんにも出ないよっ！」

「褒めてるわけじゃないと思いますよ。ルナちゃん」

三人は手近にあるイスに座る。ルナが言ったようにちょうど時間だったために周りには家族連れや友達同士、カップルがいた。

ほぼ満席状態だったのに、三人がイスに座れたのは運が良かったのだろう。

しばらくするとイルカショーが始まり司会の係員がショーを進めていく。

イルカがジャンプするのから始まり。係員がイルカの背中に乗ったりとショーを盛り上がっていった。

イルカショーを見た子供たちははしゃぎまくっている。ラルたち三人もはしゃいではないが、心の中でははしゃぎいるだろう。

「すごいねっ！ ラーちゃん！ イルカってあんなに頭いいんだね！」

……子供みたいにはしゃいでいる人が一人いた。

>休憩所<

イルカショーをみて、少しばかり気持ちが高揚した三人は水族館の休憩所で、身体を休めていた。

「いや、すごかったな」

「うん。あんなにいろんな芸ができるなんて思わなかった！」

「興奮しすぎですわ、ルナちゃん。気持ちはわからなくてもないですけど」

会話はやはり、さきほどのイルカショー。

ルナにいたっては気持ちが高ぶっており。ラル、リアスの二人かがりでなだめている。

「水族館でしかイルカショーは見れないからな。見れて良かったよ」

「ラーくんの言うとおりですね。いい経験になりましたわ」

ある程度ルナをなだめたラルとリアスは感じたことをそれぞれ述べる。

直接言っているわけではないが、ルナを褒めているのが伺える。うかが

「さて、休んだことだし、今度はゆっくりと見てまわろう」

休憩所から出ながら、すでに両腕にいるルナとリアスを言うラル。二人はそれぞれ楽しそうな笑顔で答える。

その後、ラルたち三人は水族館を見てまわった。

途中、ラッコやペンギンが可愛くて欲しい、と言った。どこかの子供っぽい王女様をなだめたり。

なだめているために、ちょっと離れた一瞬にナンパにされてるリアスを連れいったりと、色々と忙しかったが三人とも、初めて水族館を存分に楽しんでいた。

「いやー、楽しいね。ラーちゃん、リアスちゃん！」

「さっきから、それしか言っていないぞルナ」

「楽しいのは事実だから、しょうがないよ！」

「いつも通りですわね、ルナちゃんったら」

水族館を全て見たため。三人は出口のお土産コーナーで物色している。三人とも何を買うか迷っているようだが、その気になれば、お土産どころか、水族館全部を買えるだけの財力と権力を持っている。

「ラーちゃん。これ買っていていい？」

「ん？ お土産のクッキーはいいが、後ろ手に隠れているイルカの本彫りはダメだぞ？ 似たようなやつがあるからな」

「や、やだなー。ラーちゃん。こ、これはお父さんへのお土産だよ？」

「神帝様に？」

ギクリ、と身体を震わせたルナは照れるように言い訳を答え。ルナは驚いたような表情をする。

「うん。お父さんまだ病院だし、お見舞いにも行ってないし……それで」

「ルナ……」

目を伏せながら、つぶやくルナに思わず声がかかるラルだが、

「あら？ ルナちゃん、それってまえにテレビで見た置物ですわよね？ ルナちゃんが欲しいって言った？」

「ルナ……？」

「……」

お土産を買ってきたリアスがルナの持っている置物を見ながら、首をかしげる。

それを聞いたラルをルナに顔を向け、ルナは無言で顔を横に、フルフル、と振りながら後ずさりをする。

「う、ラーちゃん、ダ、ダメ？」

「絶対ダメっ！」

> 帰りのバス<

はしゃぎ疲れたのか、ルナとリアスはラルの肩に頭を置きながら、すうすう、と寝息をたてている。

ラル自身も少しばかり眠いのだが、ここで寝てしまうと、降りる場所を通りすぎてしまうので、寝ないようにしている。

「むにゃむにゃ、……ラーちゃん……」

「……ラーくん……」

クスっ、とルナとリアスの寝言に思わず笑ってしまい、二人の頭を撫でる。

（昔はもっとはしゃぐ王女様だったのにな、今はもう立派な女性か……リアスはともかくルナはまだ子供っぽいか）

ふと、二人の寝顔を見て、昔のこととそんなことを思ったラルだった。

ラルと王女たち（後書き）

生まれて、彼女どころか、デートすらしたことないわー！（作者、ラルにたいし血涙）

今回は三人称でした。それも含めて感想待ってます！

オレっ娘とほのぼのお嬢様（前書き）

なんか十日で書き上げたので、投稿！

これからも姫の騎士をよろしくお願いします。

m
（
m

オレっ娘とほのぼのお嬢様

デート二日目。念入りかつ高度な結界を施してから、家の玄関を出るラル。

『いってらっしゃーい、パパ!』

ラルが出た玄関から愛娘たる銀猫シルバー・キャットのミナとレナがお見送りだ。そんな可愛い双子に見送られながら、ラルを笑う。

「行ってきます」

> 駅前のカフェ<

赤髪ツインテールのオレっ娘レイナとおっとり、ほのぼのお嬢様ラフィナが、ラルのことを待っている。

「レイナちゃん。そんなにそわそわとしなくても、待ち合わせの間にはまだ十分ほどあるのですから。ラルさんとのデートが楽しみ

なのはわかりますが？」

「べ、別にそわそわなんかしてねーし！ オ、オレはラルとのデートなんか、どうでもいい。ラルがラフィナに変なことをしないように見張りに来たただけだ！」

「あらあら、素直じゃないレイナちゃんは可愛らしいですわー」

「なっ！」

ラフィナに可愛らしい、と言われ、真っ赤にした顔を下に向けるレイナ。

普段であれば反論の一つでも言うのだが、本人が思っている以上にデートが楽しみにしているのだから、何も反論が出来ずにいる。

「あ、ラルさんが来ましたわ、レイナちゃん」

「なに！ もっと早く来いよ！」

素直じゃないですわ、とラフィナは口には出さずに心の中でつぶやく。

「悪い。待たせたか？」

「待った！ こんな時は男が早めにくるのが普通だろ！」

「早めにくるのは賛成ですが、そんな嬉しそうな顔で言っても説得力がないですわ。レイナちゃん？」

「う、うるせー」

小走りで走ってきたラルにレイナが文句をいうが、ラフィナが指摘したように言葉とは反対に嬉しそうな顔と言うか、かなり良い笑顔だった。

また、さきほどのようにラフィナに指摘され、真っ赤になった顔を下に向けている。

「やっぱり、レイナちゃんはカワイイですわ。ね、ラルさん？」

「ん？ 確かにレイナはカワイイがどっちかと言うとカッコよくないか？ ほら、いま着てる服だって男っぽいし」

レイナが着てる服は、ジーンズに有名ブランドのロゴが入っているTシャツだ。首には銀のアクセサリが輝いている。

ラルは純粹にカッコイイと思ったのだが、

「……」

「なぜ、無言で叩く、レイナ？」

「やっぱり、ラルさんですわね」

ポカポカ、とラルの胸元を叩くレイナと、はぁ、とため息をはくらフィナ。そして、頭の上にハテナマークをかかっているラルだった。

「きよ、今日はオレが女の子だと言わせてやるからな、ラル！」

「レイナちゃん？ あんまり無理はダメですよ？」

「ま、期待をしておくよ。レイナ」

「ふ、二人して、オ、オレをバカにしてっ！ 絶対、女の子って言わせてやる！ ついて来い！」

男らしくリーダーシップを発揮したレイナは目的地に向かって歩いていく。

そんな彼女の背中を見たあとに残された二人は、まったく同じタイミングで、クスッ、と笑い。その背中を追いかけた。

「で、レイナがデートの場所を選んだのがここ？」

「おう。遊びに行くだったらここしか思いつかなかった！」

「レイナちゃん……」

レイナが二人を連れてきたのは、結構大きめのゲームセンターだった。

女っぽくない、とラルとラフィナがため息をはきながら、ガクツ、と肩を落とす。

「まずはこれだな」

意気揚々とゲームセンターに入っていくレイナはパンチングマシンの前に立ち、グローブをはめ、おもいきりの向かってパンチを繰り出す。

「オラッ！」

男らしさ全開で放たれたパンチはただすごかった。しばらくすると点数が表示され、点数の上には本日一位。歴代四位とかかっていた。

「やっぱり、と言うか。なんとと言うか。レイナらしいな」

「カッコイイですわ、レイナちゃん！」

得意げな顔を向けるレイナにラルはつぶやくように、ラフィナは目をキラキラとさせていた。

「どうよ。次はラフィナ……は無理だから、ラルやれよ」

「オレか？」

「おう！」

薦められたので、お金をいれ、パンチングマシンの前でグロブをはめるラル。そして、

「はっ！」

息をはくと同時にレイナすらこえる拳で叩きこむ。

瞬間。周りから音が消え去った。

しばらくすると、表示が出てきた。

測定不能。本日一位。歴代一位。

「ん、故障か？ でも表示はされてるし、変だな？」

水族館同様にゲームセンターも初めてのラルは何がおこっているか分からないようだ。

「オ、オレが負けた？」

「レイナちゃん。しっかりしてください！」

不思議がって首を傾げているラルの後ろでは、両膝と両手をつき、沈んでいるオレっ娘とそれを必死でなぐさめているおっとり系お嬢様がいた。

「まあ、いいか。つぎは何する？」

「……いい度胸だ、ラル。今日はとことん勝負だ！」

「レイナちゃん、ファイトですわ」

指をつきだし、宣戦布告したレイナ。いまいち状況を理解しきつていないラルだが、とりあえず笑顔でそれに答える。

「これで勝負だ！」

「シューティングゲームですわね？」

「そう！ これなら腕力は関係ない。だったら、やりこんでるオレの方が有利！」

絶対に勝ってやる、と意気こむレイナとラルはそれぞれシングルモードでストーリーを進めていき、

「よ、よし。最終ステージまで行った。ライフは半分しか減らなかったし、今度は……」

『スゲーな、あれで最終ステージまでいくなんて』

『ああ。普通の奴なら第三ステージ。上手い奴でも一歩手前の第十ステージどまりだからな』

周りに集まっていた人達の声が入る。

ラルは初めてのゲームだから最終ステージまでいくことはない。オレの勝ちだ！

勝利を確信したレイナだったが、

『だけど、ライフがまったく減ってないなんて化け物じみてるな』

『しかも、ボーナスポイントも全部取ってやがるな』

はいっ？

オレのライフは約半分。ボーナスポイントは取ったが全部ではない。そして、いま、このシューティングゲームをやっているのは、オレとラルしかない。というわけは、

ギギッ、とゼンマイ仕掛けの人形のように首をラルの方に向ける
レイナ。

「案外、簡単だな。これ」

「ラルさん……」

すでにクリアをして、つまらなそうにしているラルとやけに色っぽい視線をおくっているラフィナだった。

「オレは……また、負けたのか？」

＞休憩所＜

その後、動揺したレイナはラスボスに負け、ラルに挑み続けたレイナだったが、ことごとく負け続けてしまった。

「まさか、運だけのゲームのポーカーでも負けるとは……」

「ラルさん、神がかったような引きの強さでしたわ。それに、無表情で怖かったですわ」

「ポーカーは異世界でもやっていたからな、パーティーにやってきた貴族相手に。一応、ルナとリアスの護衛だったんだけど一度やつたら、なぜか対戦してくれて要望があって、あの時は疲れたよ」

軽い笑い話みたいに話しているようだが、対戦した貴族やギャンブラーの心をへし折ったことはラルは知らない。

「オレ……もうラルに勝てないような気がしてきた」

「同感ですわ」

数多くのゲームで負けたレイナとホッケーやポーカーといった簡単なものや運試し、といったゲームで負けたラフィナ。

二人はこのデートであらためてラルの規格外の凄さが分かった。

「さて、もう帰る？ 夕方だし」

「最後にあれだけやらない？」

「私はアレがいいですわ」

小さな声でレイナが指差したのはプリクラ。ラフィナは相性占い

だった。

「じゃあ、最後にその二つだけやって帰るか」

始めに相性占いの方にいく三人。

「結構、雰囲気ですわね」

「そうだな」

「はやくやろうぜ!」

相性占いを始める三人。最初は、

『関係を選択してください』

- ・ 友達
- ・ 恋人
- ・ 夫婦

「(ど、どうしょ! こ、こ、ここでラルが恋人とか夫婦とか選択しましたら、オレ! オレ!)」

「(お、落ち着いてください! レイナちゃん!)」

やや暴走し始めたレイナをラフィナが落ち着かせようとするが、そこは夢見る女子高校生。想像が加速していく。

「(いつてらっしゃい。あ・な・た。なーんて！ ヤバい、オレ絶対ニヤついてるよ！)」

暴走したレイナの気持ちを知らないラルは無情にも友達を選択。そのあとに生年月日、年齢、血液型を入力する。

「(ああ、どうせそんな事だと思ったさ！)」

「(レイナちゃん……乙女ですわ)」

そんな事をまったく知らないラルは、機械に自分の名前を入れる。ダメーじから回復しきれていないレイナのかわりにラフィナが名前と生年月日、年齢、血液型を入れる。

・結果

相性八〇パーセント！

同い年のあなたたちは、周りから視線を感じられるくらいの仲よし。

もう一歩先のステップに上がるのも時間の問題かも。

「やりましたわ、レイナちゃん！」

「喜びようなことか？ 俺と相性よくても？」

思いのほか高評だったので喜ぶラフィナと首を傾げてるラル。
鈍感なラルには、なぜラフィナが喜んでいいのか分からないようである。

喜びを前面に出すラフィナを見て、オレも！ と意気込むレイナ。

>公園<

夕暮れの公園に三つの人影がベンチに座っているが、

「あ、あんまり落ち込まないでくださいね。レイナちゃん」

「占いだからな、占い……」

なぐさめる口調で、ずーん、と沈んでいるレイナに話しかけるラルとラフィナ。レイナ自身も頭では分かっているのだが、心の方が納得いってないように顔を地面に向けたままだ。

「……ラフィナが八〇パーセントなのに、なんでオレ二〇パーセントなんだろう？」

占いの結果が予想以上に悪かった。そのため、やる予定のプリクラをやめ、レイナを落ち着かせるために、この公園に来たラルたち三人。

ラフィナは純粹になぐさめ、自分自身に向けられる感情には鈍感だが、人の気持ちに敏感なラルは空気をを読み。ラフィナ同様にレイナをなぐさめている。

やる前まではよかったさ。やる前までは……。とぶつぶつ、つぶやくレイナ。

「（どうしましょ、ラルさん。レイナちゃん、思ったよりも落ちこんでますわ……）」

「（うーん……。いつものレイナだったら、気にしないんだけどな。今回に限って、なんで？）」

コソコソ、と話をしつつ、ラルとラフィナはどうやってレイナを元気づけようか模索していた。

夕暮れの公園の中で、青春真っ盛りの高校生が悩む内容とはたし
て言えるのだろうか。

「（そうだ。これなら……）」

「（何か、思いつきましたか、ラルさん？）」

首を傾げているラフィナにラルは目線を合わせて、任せろ、と伝
える。

その意味がわかったのか、ラフィナはこくり、と小さく頷く。

「レイナ。思ったより……女の子っぽいな」

「……なぐさめようとしてるんなら、ありがとう」

「いや、本当にそう思ってる。レイナなら、占いなんて、どうせ当
たらない。とか言って気にしないと聞いたけど、気にするなんて、
その、今時の女の子なんだなと思った」

自分の本心をそのまま言葉にしたラルにレイナをゆっくりと顔を
上げる。

上げられた顔は先程よりも大分良くなっている。

「レイナは男っぽいけど、それはレイナに美点だし、それに、また
に見せる笑顔は女の子っぽい綺麗な笑顔だと俺は思うよ」

「……帰るぞ、ラフィナ」

「え？　レ、レイナちゃん？」

黙って立ち上がったレイナはラフィナの腕を取り、そのまま足早に帰ろうとするが、

「……ラル、その……あ、ありがとう……ま、またな」

「ああ、またな。レイナ、ラフィナ」

「じゃあな……」

「ふふ、またですわ。ラルさん」

夕日に顔を向けたままレイナは小さな声でつぶやく。

レイナはラフィナの手を引いたまま帰るが、その顔は先程とは違い、笑顔で頬には夕日以外の赤色が差していた。

「（オレ、ラルを好きになって良かった！）」

「（十分、女の子ですわ。レイナちゃん）」

背中からラルの視線を感じつつ、二人は顔を笑顔に染めつつ、手

を取り合って、仲良く帰っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8625h/>

姫の騎士

2011年10月1日00時39分発行